

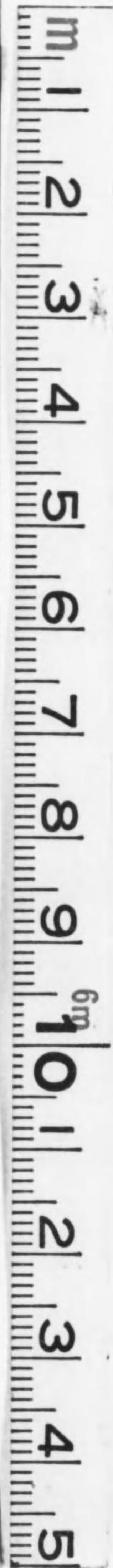
SERVUS DEI
DOMINICUS SAVIO

321
62



ドメニコ・サウイオ傳

特



始





特 265
491



Servus Dei
DOMINICUS SAVIO

尊者ド
ン・ボスコ師著

ドメニコ・サウイ才傳



Nihil obstat:

Paul Yamaguchi

IMPIMATUR.

+ F. THIRI

EPISCOPUS FUKUOKENSIS

聖父と聖子と

我等の創造者

聖靈の聖名に由りて

天主の祝福

我に豊かならんことを

ドメニコ・サウイオよ

祈り給へ

我等の扶助者

聖母の聖寵

我に豊かならんことを

ドメニコ・サウイオよ

祈り給へ

ドメニコ・サウイオよ

我は汝の傳記を誦み

汝は我が希望を知り

汝に倣ひて 汝の如くなり得べく

我を瞰下し 我が轉達を爲し給へ

アーメン

著者兼出版者の辭

教皇ウルバン八世の詔に従ひ、此の畏敬すべき主の僕ドメニコ・サウイオ
 の傳記を編むに當り、數々の物語並に豫言、幻夢、啓示、其他あらゆる
 聖寵など、卓越せる諸の事實に就いては、只々人的立證を得るもののみ
 其の題材を取ること、いたしました。

常に母たる聖會に對し、勤愼にして従順なる子であり、又、斯くあるべき
 ことを欲する吾等は、此の物語に就いて、聖會の爲したる誤謬なき判斷に敢
 て一言たりとも挿むことをせざるものであります。



三月九日
 天主の僕ドメニコ・サウイオ
 記念日



讀者

へ

(原書者より)

親愛なる青少年諸子よ！

諸子は、ドメニコ・サウイオに就いて私に何かを書くべく希望せられたので、私は、此處に諸子の希望を果すため、熱と力とを以つて此の傳記を書きました。

御覽になる通り、私の書いた此の書は、ドメニコ・サウイオの諸の逸事を、かなりに略し、簡單に現はしてゐます。私は諸子が讀まれる場合の煩雜を憂ひ、特に簡明を尊んで諸子の満足に資した次第であります。

斯書を著述るに當つて二つの困難がありました。一つには、ドメニコを知つてゐた多くの者が未だ生きてゐるので、この書の處々に對して過つた批評を下されては困ると思ひました。然れども私が此處に書いたことは、私も亦大

方の諸君も、實際に見たところであり、且、諸君に於いても、ドメニコに就いて、種々書き綴つたものを持つてゐるはずでありますから、私は臆する處なく此の第一の困難を排してしまひました。二つには、少年ドメニコが、このオラトリオに生活したのは、凡三年間位でありましたから、従つて私の書くところは其の一部分になり勝ちですし、又、延いては私自身に就いても筆を運ばせて行かぬはならぬことであります。けれども、私は、種々の事件に對して假の人物と事柄とを起て、綴りましたから、この第二の困難をも亦排し得ましたと思ひます。

然し、若し諸子が、私が私に就いて快く話してゐる處に氣付かれまする時、それは死者ドメニコ・サウイオ並に諸子に對する私の愛情であるといふことを善く掬んで載けると思ひます。何となれば、私は諸子に對し、其の父親のやうに此の愛情もて心の奥底までをも現しますからであります。

諸子の中には、必然「僕等の中には、人の龜鑑ともなるべき徳高き少年等が多くあるのに、何故ドメニコ・サウイオの傳ばかりを書きますか」と尋ねる者があるではありません。

愛する諸子よ！眞に私共の中には、天主さまの攝理によつて、徳の模範となるべき多くの少年等が居ます。此れ等少年等の中には、フアシヨ・ガブリエレ、ルア、ルイヂ、ガビヨ・カミロ、マッサリア・ジョハンニ等がゐます。けれども卓越せる品行の持主ドメニコ・サウイオの高い徳は、此れ等少年等のそれ以上であつたのであります。

諸子は、斯書から善き收護を得ねばなりません。即、あの聖アウグスチノの申されましたやうに「彼ができたのに何故私にも出来ないことがありませうか」。この言葉の意味は「彼れドメニコ・サウイオは諸子と同年輩であります。恐らく諸子よりも誘惑の危い目に逢うたかも知れませぬ。然れども。

キリスト様の御弟子となる爲めに恵まれた機會と方法とをよく捕へ之を利用して成功しました。どうして同じ人間、同じ境遇の諸子も出来ないことがありませうか」と言ふことであつて、諸子が奮發し奮勵することでありませぬ。

眞の宗教は、只言葉ばかりでなく、實行がこれに伴はねばならぬものであります。この實行といふ言葉を、善く心に留めて下さい。斯書で、その實行に就いて感すべき處を見付けましたならば、これは宜い、これは好きだ、と思ふばかりでなく、必ず、躬、實行す可く心掛けて下さい。

天主さまよ、斯書から良き收獲を得んとする讀者に、健康と聖寵とを賜へ給はんことを懇願し奉る。

最と尊き聖母よ、我等一生涯の間、忠實に奉事へたてまつるべき唯一の愛すべき天主さまを萬事に越えて熱愛し奉る爲め、心を一にし、又、靈魂を一にし得るやうに祈り給へ。

目次

一 誕生。……………一

二 その信仰。初はじめの美しいお話。ムリアルドの靈父れいふさまのお話。……………四
初聖体。……………四

三 カステルヌオボの學校がっこうに入學にふがく。悪いことは決してせぬ。……………一九

四 學校がっこうにての品行びんかう。先生の言葉。……………二七

五 モンドニオの學校がっこうにての修學しうがく。感心かしんな美しい行おこなひ。……………三三

六 記憶おぼえが良い。……………三六

七 サレヂオの園そのへ。その生涯しやうがいの始はじめ。……………四二

八 ラテン語ごの勉強べんきやう。面白い事件できごと。喧嘩けんかを止める。危險きけんを避ける。……………四八

九 聖人せいじんになる契約けいやく。……………五五



十 救靈に盡す熱心。……………三

十一 友達に對する言葉遣ひ。……………七三

十二 祈に對する愛、聖母マリアに對し奉る信心。聖母マリアの月。八

十三 告白と聖體との祕蹟に對する熱心。……………八

十四 苦業。……………九七

十五 制慾。……………一〇一

十六 無原罪にてまします聖マリア會。……………一〇

十七 少年カビヨ・カミロとの友情。……………一〇〇

十八 少年マッサリア・ヂョハンニとの友情。……………一〇七

十九 他の御恵と出來事。……………一三九

二十 死に對する考、善死の準備。……………一四七

二十一 病人の病人の看病をして、オラトリオを後に。……………一五三

二十二 離別。……………一五九

二十三 最期の告白、最期の聖體拜領。模範とすべきこと。……………一六三

二十四 尊き臨終。……………一七二

二十五 葬式。……………一七八

附 録……………一八四

ドメニコ・サウイオ傳

一 誕 生

一八四二（天保一三）年は、お恵深い年でありました。

此處はイタリアのピエモンテ州、キエリに近いリパの町であります。東天薄薔薇色に染まる四月二日の朝まだき、天主さまの祝福に因りて、鍛冶屋カルロ・サウイオの妻ブリギダは、玉のやうな男子を生みました。

赤ちゃんは、その日の午後、教會で洗禮を授與りました。

赤ちゃんの名はドメニコとつけられました。ドメニコとは、「天主さまのもの」といふ意味の辭でありますから、最上の名であります。而して他の者とは異ひ、全く天主さまが御氣に召して居られた此の兒は、洗禮を受け



たときから、愈々完全に天主さまのものとなつて居ました。

ドメニコ・サウイオは、一生涯良く天主さまに仕へることが出来ました。良く天主さまに仕へただけでなく、功績が、ながく多かつたので、天主さまから常に聖寵を百倍にして頂いて居りました。

實際、ドメニコは今年御復活大祝日のある四月に、いつまでもこの世の聖會の爲めに與へられた賜物でありました。

ドメニコは只リバの町のため、ピエモンテ州のため、又其の頃の聖會のためにのみ與へられましたものでなく、實に、これから来るべき幾世紀も幾世紀もの聖會のため、又信仰ある人々の信仰を強め、信仰なき人々を天主さまの聖堂に導くために、この世に下された天主さまの賜物であつたのであります。

天主さまは、この貧しい労働者の荒屋の飾も何もない搖籃に、いたいけ

なくも眠る無垢の赤ちゃんを見守つて微笑み給うて居られました。

天使の守の中に、其處に安らかに眠る赤ちゃんこそ、神聖なるもの、双葉であつたのであります。

リバの町よ！数多き教區の中にも眞に小さなリバの町よ！汝こそ天主さまの眞の聖意に協ふ兒を、我等のため與へてくれたものである。

一八四二（天保一三）年は、眞にお恵深い年でありました。四月二日東天薄薔薇色の朝まだき、天主さまは世界の聖會を祝福し給うたのであります。

二 その信仰。 初の美しいお話。

ムリアルドの靈父さまのお話。

初聖体。

貧しい人々は、「私は私の祖先からの家で安らかに眠ります」と云ふことの出来る家を持つてゐるものではありません。我等の聖主は、決して宮殿の中には生れ給はなかつたのであります。

ドメニコ・サウイオも又借屋の中に生れました。而も齡二歳の頃、アステイ町カステルヌオボに來たので、生れた家の懐しい想ひ出もないのであります。

正直なお父さんは、この村に業を求めて來ました。天主さまの美しい百合の花は、此處で香を放ち初めました。齡四歳のとき、もうドメニコは、

お父さんやお母さんに交つて無邪氣にも 慎深くお祈を誦へました。

あ、兒童が合せる紅葉のやうなお手々、殊勝な頭、睜る鈴のやうな眼、聖言を片言に云ふ清い唇、其の美しさ、善良さは、到底口では云へません

さて、ドメニコは、其の知つてゐる二つの大切なお祈だけでは、もはや満足が出来ませんのであります。私共が、食卓の上や、お皿の中に在るものが、やつと解つて來た位の、もの心ついた頃には、ドメニコは、もうちゃんと食事の前後に天主さまに感謝のお祈をして居りました。

ドメニコは、かうした小さなときから、心の定まる年頃まで、何事をするにもお母さんに相談して、其の教に従つて居りました。それから後、室の隅へ行つては祈るのであります。ドメニコのお父さんお母さんは、

二つの大切
な祈りは
主祈文使
祝詞であ
ります。

「ドメニコは、小さいときから私共に心配などは露ほども掛けないで、善く私共を敬ひ、どんな命令でも守りました。」

と云つてをります。

皆さん！お父さんがお仕事から歸つてくるときに、お迎ひに行くことは善いことではありませんか。ドメニコは、

「お父さん！お疲れになつたでせう！お父さんは僕のために善く働いて下さいますが、僕はお父さんに随分御心配をお掛けします。お父さんには健康を、私には善徳を、天主さまが賜さるやうに祈りませう。」

と、お父さんを迎へながら云ひ、家に入ると椅子を取つてお父さんにお勧めし、其の傍で遊びました。お父さんは

「これが私の最上の樂なであります。私は、ドメニコを抱くので、

家へ歸るのが嬉しいのであります。」

と云つてつゝりました。

或時、お客さんが一人ドメニコの家に招かれて参りました。そのお客さんは、なか／＼良い人でありましたけれども、おいしい饗膳の前に座ると馬や犬のやうに、直食べ始めました。其のとき、心潔らかなドメニコは、別に一言も云はずに食卓を去つて、外へ遊びに行つてしまひました。何故何も云はなかつたかと云ひますと、一体、聖人と云ふものは、其の幼少の時から、眞に結構な、そして感すべき配慮をするものであります。

お客さんが歸つてのち、お父さんが

「どうしてお前は食べなかつたの」

と問ひますと

「獸のやうに食事をする人とは、とても一所に食へることが出来なかつたのです」

と、ドメニコは答へました。

ドメニコは、朝凧からお祈りました。けれども、鶏が其の目を覺させるからでもなければ、又お告の鐘の音に強ひられてでもありません。天主さまに對する眞の愛からでありました。

ムリアルドの靈父さまが、かやうにお話してゐます。

『私がこの村に來た頃、お母さんに手を引かれて聖堂に來る兒童を見ました。そして私も他の人々も、無邪氣な、謹慎深い、信仰の厚い此の兒童が直目に付きました。この兒童が聖堂に來た時、門が未だ閉つてゐると、賑かに騒いでゐる他の兒童等とは異つて、閉つてゐる戸に近づいて

來て、跪づき、頭を下けて手を胸のところ合せ、門が開かれるまで熱心に祈りながら、靜かに待つてゐます。時々、雨や、雪が降つて、門は泥だらけになつてゐても、この兒童はそんなことには關はず、いつものやうに、祈つてゐました。この兒童は即ドメニコ・サウイオであつたのであります。』

『道で私に會ふときは、遠くにゐても、ドメニコは嬉しさうな姿をして私よりいつも先にお辭儀を致しました。その後、私が先生となつた學校にドメニコが私の生徒となつて來ましたが、なか／＼才智があるので、間もなく偉くなりました。』

『拙劣な友達が、悪戯をしても、決して争ひませんでした。それどころか、いつも友達が云ふ悪口を許して靜かに他處へ行くのでありました。危い遊は決してせず、教室ではおとなしくして居りました。時々悪い友

だちが、老人を おどしたり、石を投げたり、他の児童のものを奪つたりすることなどに誘はれましても、反つてそれを止めるほどで、決して悪い仲間には入りませんのでありました。』

『聖堂の前で待つて居るといふやうな深い信仰心は、少しも減らずに益強くなつてゆきました。齡五歳のとき、もはや、ミサ聖祭の奉事が出来ました。無論未だ小さいので、ミサ聖祭書運ぶことがなかく難しかったです。ドメニコが祭壇に近づいて、爪先で伸び上り、手を延してやつと聖祭書を置くのは、ほんとに可愛いものでありました。』

『次のやうなこともありました。』

『一八四七年正月の或朝、私はぬくぬくと温いものを着て、聖堂にミサ聖祭を捧げに行きました。雪は静かに、まだ眠りも深いムリアルドの村の上以降つてゐて、どこもかしこも銀世界になつてゐました。ふと見る

一八四七年
我弘化四年

と、ぶる／＼震ひながらお祈をし、根氣よく扉の開かれるのを待つてゐる小さな黒い影が、聖堂の門の前にほつんとあるではありませんか。私は近づいて、あつと驚いて眼をばち／＼させ

「まあ、お前ドメニコぢやないか。」

と申しました。黒い小さな影は、振り返つて微笑みながら

「さあ、靈父さま、いらつしゃい。一緒に聖堂のミサ聖祭の準備を致しませう。」

と云ひました。そこで、私とドメニコとは聖堂に入り、いつも聖體の前に輝いてゐるランプの前に静かに参りました。そしていつもの如く、

ドメニコはミサ聖祭の奉事をしました。』

『私は、この聖寵豊かな立派な靈魂を見て、

「これこそ望のある善い兒だ。この立派な兒に、美しい實を與へるため

天主さまが益々お恵をお與へ下さいますやうに。」
と、いつもく、獨言を云ふのであります。』
これがムリアルドの靈父さまのお話であります。

ドメニコは天主さまとともに處して居りましたから、聖堂に居るときも又家に居るときも、いつも同じことでありました。又ムリアルドの靈父さまのところへ學問に行つてゐましたが、一回も吐られたことなどはないのであります。

扱、ドメニコは初聖體を受けることになりましたので、公教要理を善く暗記し、この大切な秘蹟を善く悟り、殊更に善く之を受ける望を興しました。

この頃、どこの村でも、齡十二歳になるまで、小供は聖體を受けることが出来ませんのであります。それで七齡のドメニコは、無論出来なかつたのであります。其の上ドメニコは、體が小さかつたので、尙更小供らしく見えしました。そこで靈父さまは、他の靈父さまに御相談なさいました結果、設令十二歳にならぬでも、祝聖式によつて、パンが聖體に變化する理由が善く解つてゐるドメニコには、受けさせても差支へないと云ふことになりました。

かうしてドメニコは、七歳のとき、初聖體を許されました。

此の許可を獲てドメニコは、どんなに喜んだことでありませう。とても繪や字には書けません。初聖體を許されたドメニコは家へ躍んで行つて、感激の聲を震はして、お母さんに話しました。そして祈つたり、讀んだり又聖堂ではミサ聖祭の前後に黙想したりして、その靈魂は、もう天使達と

一八四九年
我嘉永二年

主は、ドメニコの靈魂の中から決して去り給はぬやうになりました。

「一八四九年、ドメニコ・サウイオ七歳で初聖體を受く、その善き記念のために」

と、覺束無い手で書かれた小さな日記が、其の後見出されました。其處には、かやうなことも書いてありました。

- 一 僕は、毎度告白をします。そして聽罪靈父さまがお許しになる毎に聖體を受けます
- 二 僕は、祭日を聖日と致します
- 三 僕のお友達は、イエズスさまとマリアさまであります

四 僕は、罪を犯すくらゐなら死にます

ドメニコは、今七歳で書いた此の自戒を、一生の間、立派に守りました。

斯書を讀んでゐる少年たちの中に、まだ初聖體をお受けになつてゐない人がありましたなら、ドメニコ・サウイオを模範にするやうに心からお勧め致します。

そして、總ての世のお父さん、お母さん、青年達にも、初聖體拜領を大切にするやう、心からお勧め致します。

初聖體拜領が、生涯を通じての道德の源であることを信じて御覽なさい。初聖體拜領を善良にして、その生涯が悪いと考へられることでありませうか。若しも、そんなことがあつたならば、それは不思議なこととせう。世

の中の、両親に心配を掛ける多くの悪い少年に就いて考へて見ますと、その少年たちには、初聖體拜領の準備が悪かつたといふことを見付けます。初聖體を悪く受けるよりも、寧ろそれを延すか、又は受けぬ方がよいのであります。

三 カステルヌオボの學校に入學。

悪いことは 決してせぬ。

齡十歳のときドメニコ・サウイオは、一先初等科の學問を終へました。靈父さまは、ドメニコが知らねばならぬことは、皆教へてしまひました。で、今は早、ドメニコをカステルヌオボの町學校に送らねばならなかつたのであります。

けれども、サウイオのお父さんは、お金持ではありません。お父さんは敏い腕と、充分な勇氣とを持つて居りましたが、悲しいことには、お金はありません。ですから、我が子を學校の寄宿舎に入れて學問させることはとても出来ぬことであります。けれども、ドメニコは學問がしたかつたのであります。ドメニコは學問に餓ゑてをりました。

家中の者は集つて相談致しました。

「若しも、僕が小鳥であつたなら、僕は毎日々々カステルヌオボに飛んで行つて、學問することが出来ますのに」

と、ドメニコは相談の中で、ときくく云ひました。

とうくくお父さんお母さんはドメニコが學校に行くことを許しなさいました。そして、ドメニコは、毎日々々カステルヌオボの學校へ通ふことになりました。

學校へ通ふ道には、樹に登るとか、花を取るとか、石投をして遊ぶとか種々道草をするに好い機會がありました。けれども、ドメニコは、そんなことには目も遣らず最も温順い友とお話をし、最も騒がしい者等が時間を無益にしてゐるのには關はず、靜かに學校へ通ひました。ドメニコは、天主さまに最も近い兒でありましたから、實は一人で行くのが好きであつた

のでした。

降つても照つても、又熱い時も寒い時も、満足の心持で通ひ續けました

『小さきイエズスさまは學校へ……』

と、私共が子供の時、歌つた唱歌を想ひ出します。さうです！ドメニコこそ、この唱歌のイエズスさまの如くでありました。

或夏の日でありました。ドメニコ・サウイオが學校へと道を急ぐとき、通り掛りの人がドメニコに近づいて参りました。長い道を歩くときは、假令胸白小僧とでも、話をしながら行くのは愉快なことですから、その人も近づいて來たのでありました。

旅人「ねエ、坊ちゃん、お前は、たつた一人で歩くなんて恐くはないの。」

ドメニコ「い、え、爺さん、僕は一人ぢやありませんよ。いつも守護の天

使と一緒に歩いてゐるのよ。」

旅人「けれども、この暑ぢやー、行つたり來たりは草臥るだらうネ。」

ドメニコ「い、え、い、え、爺さん、お恵を僕達に下さる聖主のために働くときは、草臥ることなんか一寸もありませんよ。」

旅人「え、聖主とは」

ドメニコ「愛をもつて捧げるならば、一杯のコツブの水にも報いて下さるあの天地の創造主のことです。」

その旅人は此の言葉を聞いて、感激して涙を流した事と思ひます。

さて、ドメニコは、學校では模範生でしたから、友達はドメニコを誘惑することは、到底出来ぬことでありましたが、模範生といふものは、一寸した機會にも誘惑に狙はれてゐるものであります。

ドメニコのお友だちは、或日ドメニコを游泳に誘ひました。ドメニコは別に差支へはありませんでしたが、

「これはあまり善いことでない」

といふことを考へたのでありません。

ドメニコは、もと／＼人が驚く位の信仰を持つてゐました。ドメニコは少年達が無作法にも裸になることや、水の中で馬鹿騒ぎをすることや、恥づべき話を平氣で交すことなどを熟知してゐましたから、どんなことをしても、游泳には行くまいと固く心を決めました。けれども友達は、なかなか承知せず、又勧誘にやつて参りました。

少年達「おい、ドメニコ、君、一緒に行かないか」

ドメニコ「何處へ。」

少年達「水泳にさ。」

ドメニコ「い、え、皆さん、僕は参りません。僕は泳ぐことも出来ませんし、それに水に溺れて死ぬのが怖いのですもの。」

少年達「行かうよ！行かうよ！面白いぜ！泳いでるれば熱いことはないし、後で御飯は旨いし、第一體のために良いのだぜ。」

ドメニコ「ですが、僕は先刻云ふ通り溺れて死ぬのが怖いのですもの。」

少年達「そんなことを恐がつては徒勞だ、僕たちが君に游泳を教へる、君はそれを見てゐると、直僕達と同じやうに泳げるぜ、まるで魚のやうに。」

ドメニコ「しかし皆さん、益も無い危険な處へ行くことは罪になります。」
少年達「でも、皆行くぢやないか。」

ドメニコ「皆が行くからといつて、それが罪でないといふ證據にはなりません。」

少年達「ぢや、君は泳がないでゐて、たゞ見てゐるだけなら宜いだらう」
ドメニコ「い、え、い、え、もうたくさんです。そんなことは、僕、ほんとに困つてしまひます。もう返答することも出来ないのです。」

少年達「い、よ、おいでよ、悪いことぢやないんだよ、それに僕等と一緒に危なくはないよ。」

ドメニコ「さう。よし。けれども、今お母さんのお許を伺つて來ませう。
お母さんが「よろしい」とおつしやつたら行きませう。「いけない」とおつしやつたら行きません。」

少年達「黙れ！大馬鹿者奴！お前のお母さんになんか云つちやないけな
いぞ！お前のお母さんは、必然許さなればかりか、僕等の家の者に告
げる、僕等は後で、ぶたれるぢやないか！」

ドメニコ「ですから、若しお母さんがお許しにならなければ、それは悪い

ことなんです。僕は行きません。それにネ、ありのまゝのところを云へば、この前、君等が僕を連れて行つたときに、僕はもう二度とこんな處には来まいと決心したよ。それは天主さまに背くかも知れないやうな遊だし、又溺れて死んで了ふかも知れん遊です。もう僕には水泳を教へるなんて云はないで下さい。君等だつて、又、お父さんや、お母さんが喜ばないことなら、水泳になど、やはり行つてはならないではありませんか。天主さまは言ふことを聞かない子供を罰しますもの。」友達は皆嘲笑ひました。けれどもドメニコは参りませんでした。

四 學校にての品行。

先生の言葉。

茲に、學校に於ける少年等の模範のお話を致しませう。若し皆さんが、學校でのドメニコを倣ねたならば、後で後悔するやうなことは無いでせう。學校では、ドメニコは皆の者に對して氣柔しくしてゐました。わけでも大いに、かしこい者や、非常に勤學する者に對しては、特に氣柔しくしてゐました。けれども、腕白小僧、心の汚ない者、怠け者、嘘つき、天主さまを瀆す者等を毛蟲のやうに避けてゐました。

ドメニコは、學問はいつも一番でした。ドメニコはもとく大層恰憫ではあつたのですが、そのため一番になるといふ理由では無いのです。唯せねばならぬ學問を大層好んだからなのであります。

西洋では、朝の授業と、午後の授業と、さか離れてゐる。に、小學生の習慣が、往々ありま

學問を好みましたからこそ、か弱い體にも關はらず、この善良な少年は學校に行くため、日に四次宛一里もある道を通つたのでありました。ドメニコは、學校で注意して學んだ事を善く復習致しました。而して可憐な少年を見付けると、なるべく直友達になるやうにして居りました。人の悪口を云つたりする拙劣な友達には、叮嚀に挨拶するだけで近づかぬやうにしてゐました。

ほんとに、この行は、良い少年にならうとする人達にとつて、模範となることでもあります。私は、ドメニコの先生であるダロラ・アレキサンドロ靈父さまが申されたことを、今、茲に掲げて見ませう。

『私は、ドメニコ・サウイオに就いてお話しするのは、大層嬉しいことであります。ドメニコは、私をお父さんのやうに愛しましたほど、私の

愛を受けいれてくれました。私は、ドメニコの學問や、品行や、德行やを良く想ひ出します。

ドメニコは、小學初級をムリアルドで終り、一八五二年六月廿一日の聖アロイヂオの祝日に私の學校に入りました。體は細長く、容顏はどことなく重々しい少年でありました。その性質は柔和で、いつも氣持の變らぬ良い生徒でありました。聖堂や教場では、いつも行儀が良いので先生の眼やお話は、いつもこの少年に向つて爲されてゐるのであります。悪い少年に、盡した力が徒勞になつても、ドメニコを見ると、それが報いられるを感ずるのであります。そして學問や信仰に對して正直でありましたから、一年後には大いに學問が出来るやうになりました。私共は、ドメニコが信者の生徒として、其の務を守るため、周く爲した注意を、特に、感心せねばなりません。その上、學校に通ふのに、毎

一八五二年
我嘉永五年

オラトリオ
は尊者ド
・ボスコ
の造つた聖
堂や学校の
ある青年訓
練所であり
ます

日長い道を二次往復しました。冬、寒の強いときも、雨や雪で困るときも休んだことはありません。

眞に感心すべき生徒でありましたが、惜いことに病氣になつて、私の學校に來ることが出来なくなりましたので、私は大いに心を痛めました。私は、ドメニコには、健康とお金とが餘り無いから、この上、學問を續けることは難しいと思つて心配致しましたが、其の後、トリノのオラトリオに行つてゐると聞き、甚嬉しく思ひました。』

五 モンドニオの學校にての

修學。感心な美しい行。

一八五二（嘉永五）年、ドメニコの兩親はムリアルドを去つて、モンドニオに行かねばならぬことになりました。

ドメニコも無論新しい學校に移りました。天主さまが、この少年を此處から彼處へ、彼處から此處へとお移しになるのを見ますと、この世が逐箇であることをお示しになつてゐるやうに思はれます。また、多くの人達に、その徳の模範を示すために、天主さまがこの少年を、村から村へお移しになるやうにも思はれます。

モンドニオに於いても、ドメニコはムリアルドとカステルヌオボとに於けるやうな立派な行を續けました。

ドメニコの新しい先生であるドン・クリエロが私に斯う云ひました。

『私は二十年間も青少年の指導に力を盡して來ましたが、ドメニコに較べることが出来る少年を未だ一人も見ることがありません。ドメニコは小さくあつたが、それはく用心深い少年でした。その注意、精神、親切が先生に愛せられ、また友達にも大いに喜ばれました。私は、こんな小さな少年で、信仰が厚く、熱心に祈るとはめづらしいことであると思ひました。ドメニコは、屢次私の靈魂は、熱心をもつて天使達と一緒に居り、天國の樂を認めて居るのです。』と、獨言を云つてゐるかと思はれました。』

なほ、ドン・クリエロは、かやうな美しいお話をも致しました。

『或日、學校から追ひ出される程の、悪戯でない重い過失を誰かが致しました。サウイオは理由もなく罪人として先生に告げられました。』

皆さん！ドン・クリエロが、これを聞いて、どんなに驚いたかお解りになりませう。小さき模範でもあり、又立派な良い少年でもあるドメニコが訴へられたとは。ドン・クリエロはがっかりして呆然となつてしまひました。

さて、ドン・クリエロは、全生徒の前で、ドメニコに思ひ切つた恐しい戒を申し渡しました。けれども、事、苟にも最優等生に關はるので、ドン・クリエロは刑罰に猶豫をなしまして、結局、この次、かういふことがあれば、學校を追ひ出すといふ契約をしました。

ドメニコは慎まやかに頭を垂れてゐました。恰も罪なくして刑せらるるイエズスさまのやうに。

この事で、呆然となつてゐたドン・クリエロは、その翌日眞の罪人を見付けました。早速ドメニコを呼んで

ドン・クリエロ「どうして、君は、昨日、君が罪人でないことを云ひませんでしたか」

と、問ひました。ドメニコは

「あの少年は、すでに他に悪いことをしてありましたから、若し僕が罪人でないと云つたなら、恐らく學校から追ひ出されてしまつたでせう。僕は罪人として先生に告げられたのは、これが初てのことです。それから、先生のお赦が頂けることを望んでゐました。それに僕は、無實の罪を訴へた憎い人をお赦しになつたイエズスさまを想ひましたから。」と、答へました。

かういふ風にドメニコは、學校では、優れた生徒、優れたお友達でした。かうして、ドメニコは、自ら進んで天主さまに近づく光明の彼方へと歩いて居りました。

六 記憶が良い。

これからお話しすることは、私が躬ら見てよく知つてゐることですから一層確なことであります。

一八五四(安政元)年、ドン・クリエロが信仰厚い學問の良く出来る少年に就いて私に話しました。そして

『貴師の學校にも夥多の少年が居りますが、こんな良い少年は一人もありませんまい。まゝ試しに會つて御覽なさい。も一人の聖アロイヂオを見出しますよ。』

と、申されました。

私は、毎年遠足をするため、またロザリオの聖母を祝ふため、ムリアルドに行きますので、その村で私はドメニコと會ふ契約をしました。

聖アロイヂオ S. Aloysius Gonzaga は一五六八(永録十一)年生れ、一五九二(天正十九)年に世を去りました。イタリヤの貴族の出であります。イエズス會に入りました。善行秀で修徳高く天使的聖人と稱讃せられたるおかた

であります

十月の第一月曜日、朝日麗かな爽々しい日、父と連れ立つて私を訪ふ少年がありました。この少年の私に會つて喜ぶ容態が、特に目に付きしました。私は少年に尋ねました。

私「君はどなたですか、どこから來ましたか」

少年「僕は、ドメニコ・サウイオであります。僕の先生であるドン・クリエロさまが、貴師に僕のことはお話ししてあります。僕はお父さんと一緒にモンドニオから参りました」

そこで、私はこの少年に其の學問のこと、生涯のことを尋ねました。ドメニコ「僕をどうお考へになりますか。トリノへ學問に連れていつて下さいますか。」

私「さて、君の心の中には、呉服物があるやうに私には考へられますよ」と、私は、笑つて答へました。



ドメニコ「その呉服物は、何かの益に立つことが出来るでせうか」

私「天主さまに、差上げる美しい着物を作るために、益に立ちますよ。」
ドメニコ「靈父さま、僕は呉服物になります。そして靈父さま、貴師は裁縫師さんになつて下さい。さあ一緒に連れになつて下さいまし。靈父さまは、僕でもつて、吾主に捧げる美しい着物を作ることが出来ませう。」

私「しかし、私は、君の弱い體が到底學問を許すまいと案じるのです。」
ドメニコ「いゝえ、大丈夫です。天主さまは、今まで僕に力と健康をくだされました。今後も、又、必然僕をお助けくださるでせう。」

私「けれども、君は、學問を終へたとき、一體何になる心算ですか」
ドメニコ「天主さまよりお許しになれば、僕は司祭になります。」

私「よろしい。お待ちなさい。私は君が學問に堪えるかどうか知りたい

のです。ときに、私が書いたカトリック讀本の、この一冊の此處を暗誦するのですよ。明日、君は、來て暗誦して御覽なさい。」
二人の話は終りました。私は、ドメニコを遊びにやり、其の父と話し初めました。

八分の後、ドメニコは歸つて参りました。

ドメニコ「靈父さま、おのぞみならば、先程の暗誦課題を今暗誦しませう」と、云つて命令られた所を暗誦し、その意義をさへ解きました。そのとき私は、これは人間業ではないと驚きました。

私「君は、暗誦課題のために大いに時間を早めましたネ。私も、私のお答を早く致しませう。私は、君をトリノへ連れて参りませう。そして今日から、君は、私の可愛いく、少年の一人となるのです。私共二人が、天主さまの聖意に適ふやう祈りなさい。」

そのとき、ドメニコは喜んで私の両手を取り、信仰深く接吻しました。

七 サレチオの園へ。

其の生涯の始。

若いときは、眞に決心の變り易いものです。今日定めて明日守らず、また今日徳を大切にして、明日罪を犯すことがあります。したがって、注意がないと、善く出来る少年でも悪くなります。けれども、ドメニコは、そんなことはなく、全く特別な少年でありました。

ドメニコは、一刻の猶豫もせず、準備し終るや、直さまトリノに來ました。必然、その懐しい兩親の家、柔しい母、善き父、親しめる兄弟や姉妹、さては一寸したことにも情を引かれる種々な物等と袂を別つて、涙にくれたことでせう。けれども、天主さまの聖聲は、すでに御命令をお出し

になりましたので、ドメニコの靈魂は喜び躍つて居りました。

オラトリオへ着きまして、ドメニコは、私の室に入つて來ました。そして、長上の人達に叮嚀に挨拶しました。「主よ！我に靈魂を與へて、他の物を與へ給はざれ」と書いてある額に目を付けました。私は、ドメニコが熱心にその字を讀んでゐるのを見て、その意味を教へてやらうと思ひました。

ドメニコは少し考へた後

「あゝ、解りました。この意味は、此處では、お金の取引は致しません。が、靈魂の取引をするといふ意味です。僕の靈魂は、靈父さまが得なさらうとなされるもの、一つであることを望みます。」と、申しました。

ドメニコのいと尊き生涯は初まり、天主さまの百合の花はサレヂオの園

に咲き初めました。

ドメニコは、オラトリオと其の規則、その學問、その友達を愛しました。それは、ドメニコが天主さまを愛してゐたからでありました。

ドメニコは、喜んで説教を聴きました。天主さまの聖言は、天國に行く道であると心に刻んで置いたからであります。それで、説教で聞いた種々な教を善く守つて、いつも變ることがありませんでした。

どんなに難しい道徳のお話も、また公教要理や説教の長いお話も、ドメニコには樂となりました。善く解らぬところがあると、長上の人に尋ねました。この出發點から、ドメニコの模範的生涯や、堅く規則を守ることが初つたのであります。

規則や戒律の解らぬところがあると、長上の人に近づき、叮嚀に尋ねて意見を聴きました。そして勤むべきことを勤めないときは、注意して貰

ふやうに願つて居りました。

私共は、ドメニコがその友達を大切にすることを譽めねばなりません。規則も守らず、信仰もなく、その上軽率な少年には、ドメニコは近づきませんでした。ですから善く勉強する模範的少年達は、直とドメニコのお友達になりました。

聖母の無原罪の大祝日が近づきましたので、校長は、その日を善くお祝ひするやう、毎晩生徒を集めて、靈魂に必要な恵を聖マリアに願ふ可く注意をしました。

ドメニコは、非常な熱心をもつて、その大祝日に與かりました。そして毎日一つ宛を選んで行はうと思ひ、九つの尊い教を紙に書き、告白を善くし、熱心をもつて聖體を受けました。お祭がすんだ後、聽罪靈父さまのお勸に従ひ、聖母マリアの祭壇の前に蹲踞づいて、初聖體のとき契約した言

葉を再反覆しました。

「聖マリアよ、私は、私の心を捧げます。私は、いつでも聖マリアのものであることをお許してください。イエズスよ、聖マリアよ、いつも私の友達となつてください。罪を犯すよりも、むしろ死なしめてください」と反覆しました。

ドメニコは、かうしたお祈りで、聖母を其の扶助と頼みました。

これがため、その行が不思議にも優れたものであつたのであります。

私が、ドメニコの傳記を書くのは、斯書を讀まれる少年達が、共に其の徳と行とを大事に思はねばならぬためなのであります。

で、私は、此の傳記をば年代順によらず、類似の行を纏めては一章宛に書いてゐるのであります。

八 ラテン語の學問。面白い事件。

喧嘩を止める。危険を避ける。

ドメニコは、初めモンドニオでラテン語を學んで居りましたが、猶良く勉強して、第二學年に編入されました。

其頃は、今のやうにオラトリオに、學校が建つてをりませんでしたからドメニコは、ボンザニノといふ立派な學者について學問を續けました。

第三學年になつたときであります。碩學ボンザニオ氏は

「私は、ドメニコほど温和な、可憐な、そして良く勉強する生徒を見たことがない。」

と譽めました。

眞に、ドメニコは、何事に就いても、また何處に行つても、いつも善い

模範でありました。着物も、姿も、少しも飾つたところはありませんでした。

なるほど、身分は高いものではありませんが、どことなく氣品があつて容姿が高尙でありました。そして、人に對して如何にも親切でありましたから、貧乏の少年も、富裕の少年も、ドメニコの友達になることが好きでありました。天主さまは、悪い生徒があると、先生をして、その生徒の席を、ドメニコの側に置かせましたやうに思はれます。ドメニコは、かうした生徒を善い人にするために一生懸命力を盡しました。

ドメニコは皆を愛しました。そして、最も優れた人達と一所に、天主さまを頌め歌ひ、弱い者を勇氣づけ、悪い友達を戒め導きました。

その友達が皆イエズスさまに對し奉る愛を同じくして集り、同じ足並をもつて、一步一步聖人の境域に近づいて行くことを望みました。

皆と一緒に遊ぶとき、氣柔しく、快活で、元氣良く遊びました。

その頃、ドメニコは、少年としては感心するほどの良い行を多くしてゐました。

或時、二人の友達が互に争を致して、なか／＼、和睦をしようと思ひませんが、かくて互に悪口を云ひ合つて、到頭石を投げ合つて勝負を決しようと思ひました。ドメニコは、二人の争を知つて止めようと思ひましたが、二人とも我れより大きい人なので、なか／＼仲裁することが出来なかつたのです。ドメニコは、初、さうしたことは、人間の善い心と天主さまの十戒とに叛く事であるから止めなさいと、手紙を出して争を治めようと思ひましたが、二人はどうしても聞きません。

實際、二人共大いに怒つてゐましたので、ドメニコが、どんなことを云

つても無益でありました。

けれども、石の投げ合ひすれば、體に怪我もしますし、第一罪を犯すといふ危険さへありますので、ドメニコは、大いに憂慮いたしました。さて、どうしようといふ術もありません。

ドメニコは、ふと靈感を受けました。

學校が終つたとき、その友達を待ち受けてゐて、一人々々に向つて云ふには

ドメニコ「君達が、どうしても石の投げ合ひをするのなら、僕が一つの條件をそれに付けたいと思ふが聞いてくれまいか。」

二人の友は

「石の投げ合ひを止めるのでなければ聞かう。」

と云ひながら、二人は、もう争を始め居りました。

甲「君が馬鹿だ！」

乙「僕は、君の頭か、僕の頭か、どちらかが、割られなければ承知しないんだぞ！」

ドメニコは、その言葉を聞いて大いに悲しみました。そしてドメニコ「僕の出す条件では、とても君達の争は止めることが出来さうもない。」

と、悲しさに申しました。

友「どんな条件だね」

ドメニコ「僕は、それを喧嘩の場所に行つて話したいのです。」

友「君は、僕達を騙して止めるのだらう！」

ドメニコ「い、え、さうではないから安心なさい。」

友「必然、君は誰かを呼んで来る心算だらう。」



ドメニコ「さうしても宜いかも知れない。けれども、僕はさうはすまい。」
二人の友達は承知し、ドメニコと三人で郊外に在る城の側を喧嘩の場所
へと急ぎました。

二人の悪い友達は、さっきから、もう怒つてゐましたので、道々闘を
挑んで居つたが、ドメニコは、どうしても闘はせませんでした。

喧嘩の場所に着いたとき、ドメニコは全く不意な計畫に出でました。
先、二人は別れて、手に手に石を取り、合戦を始めようとして居ます。

そのとき、ドメニコは

「君達は、喧嘩をする前に僕の條件を聞く契約でした。」

と云ひながら、懐から十字架を、す早く取り出し、右手で差上げ

「君達は、この十字架に熟く目を見張つて御覽。そして「イエズス・キ

リストは、無罪の躬を十字架に懸けた人達をすら、赦して死に給うた

が、罪人我は、今復讐の争をして、イエズス・キリストに背く心算です」と、云ひながら、君達が投げ合ふ最初の石を僕に投けてごらんと、云つて、ひどく怒つてゐる方の友に進み寄り、跪き

「さあ、君から始めてください。石を投げつけてください！」と願ひました。

こんな條件とは少しも思はなかつた其の友は、身震ひしました。而して「いゝえ、いゝえ、それは出来ぬことです。僕は、君に敵對することは何も無いどころか、誰か君をいぢめる者があつたら、僕は妨害して君を衛りたいくらゐです。」

と、友の云ふのを聞いたドメニコは、今度は他の者の側に進み寄つて、同じやうに云ひましたので、その者も、亦、ドメニコの友達でしたから、そんなことは出来ませんと云ひました。

これに感激したドメニコは、

「さて、君達は僕のやうな貧しい つまらぬ者にも、危害を加へることを恐れるが、救主の尊い血をもつて救はれた君達の靈魂に、危いことをしないで、互に云つた悪口を赦し合ふことは出来ませんか。救靈よりの復讐の方を大切にしますか。」

と、眞面目に云ひ畢つて、いつまでも十字架を握つたまゝ、黙つてゐました。二人の友達は、かうした其の愛と、勇氣とに、すっかり負けてしまひました。

二人の中の一人は、後でかやうに申してをります。

「その時、僕は悲しかつたのです。そして、僕等の悪い考を止めさせようと、立派な良い友であるドメニコが、あんなに力を盡しましたから僕は恥かしくなつて了ひました。それから、和睦した證をドメニコに

見せるため、相手の友を赦し、僕のため一人の聽罪靈父さまを斡旋するやうに願ひました。それで、ドメニコの親しい友達となることが出来、天主さまの子になることが出来ました。」

總て、今お話したやうな境遇には、信者の子供は、ドメニコ・サウイオが、やつたやうなことを倣ねてゆけば宜いのであります。

さて、この事件の中で、ドメニコを讃むべき数々のことのうち、最も良いののは、外の事ではありません。即此の事を例の二人の友が、他人に話すまで、ドメニコは、誰にも喋らなかつたので、こんな喧嘩があつたかどうか知つてゐた人は一人も無かつたといふことであります。

村から町へ通ふ少年のため、罪の動機になるのは、學校の往還の道でしたが、ドメニコには、これが反つて徳を積む良い機會となつてをりました

長上の者の命令を良く守つて、ドメニコは道草を食はず、悪い事には目もくれず耳も貸しません。道草を食つたり、石を投げたりする悪い少年達には、いつも離れるやうにしてをりました。

又許なしに散歩に行つたり、學校へ行かずに遊に行かうと誘はれましても、決してさうしたことは致しません。誘つた友達にかう云ふのであります。

「僕が、最も大切にしている遊は、我が務を守ることなのです。君達が若し眞の僕の友達なら、僕の務を妨げないで、それを助けてくれた方が宜いではありませんか。」

けれども、或日、ドメニコは友達に騙されて、學校への道でなく何處か他へ行く道を歩いて行つたことがありました。が、暫して氣付き、友達に

向つて

「皆さん、僕は學校へ行かねばなりません。僕は、君達の誘に從ふたことを後悔してゐます。これから後、又こんな悪い誘を一度でもすれば僕は、もう君達と友達になりません。」

と、申しました。

友達は、ドメニコの勸を受けて、共に學校へと急ぎました。その後、こんな悪い誘は、もうありませんでした。

ドメニコは學問が良く出来ましたから、學年の終に及第を致しました。が、其の體は少し弱くなつてゐましたので、翌年は町の學校へは遣らないで、オラトリオに在る學校に留らせました。それでその體を大切にすることが出来たのでありました。

ラテン語第四學年のときは、體も大分丈夫になつたやうでありましたか

ら、ドン・ピッコ・マテオといふ學者の弟子となりました。その學者は、ドメニコのことをよく聞いてゐましたので、授業料を取らずにその弟子と致しました。

九 聖人になる契約。

ドメニコの、聖人になる契約に就いて少しお話しませう。

ドメニコがオラトリオに来て六ヶ月位たつたとき、聖人になるのは易いことであるといふ説教を聴きました。ドメニコが氣付いたのは、左の三つのことでした。それは

あらゆる人が、聖人になることは、天主さまの聖旨であります。

聖人になるのは、易いことであります。

聖人は、天國にて大いなる褒美を受けます。

といふことでした。

この説教によつて、ドメニコの心は燃え立ち、天主さまに對する愛の火が強くなつたのであります。四五日別段の話もしませんでした。その中に、友達も、私も、氣が付くほどになつて参りました。私は、ドメニコが狂人になつたと思つて心配して尋ねて見ました。

私「ネ君、君は病氣ではありませんか。」

ドメニコ「いゝえ、いゝえ、少しも容體は悪くはないのであります。けれども善いことの爲めに心配してゐるのであります。」

私「どんなことですか」

ドメニコ「僕は、聖人になりたいのであります。これは容易なことではないと思つてゐましたが、今僕は、誰でも聖人になり、愉快になることが出来るのを知りました。ですから、僕は、聖人になりたいのであります。」

靈父さま、聖人になるには、どうしたら宜いのでありますか教へてくださいませ。」

私は答へて

「騒亂の中に在つては、天主さまの聖聲は聞えるものではありません。それは静かな心を持つことに在るのです。」

と、申しました。そして、その望を譽めて、いつも平均した喜びが、私の望むところであり、又務を良く守ること、いつでも友達と仲善く遊ぶこと等を勧めました。

或日、私はドメニコに褒美を遣らうと思つて

私「何でも好きなものを云ひなさい。」と、申しましたら

ドメニコ「靈父さまが、僕を聖人にしてくださることが、最善最良の褒美

です。僕は、僕の總てを天主さまに捧げます。何事でも、天主さまのためならする心算であります。聖人にならねば徒勞であります。聖人になることが、天主さまの聖旨でありますから、僕は、さうしなければなりません。」

と答へました。

時々、私は生徒達に愛情の證として

「皆さんは、何が欲しいか。欲しいものを紙に書いて私のところへ出さない。」

と、申します。すると種々な願が出て参りますが、ドメニコのは「僕の靈魂の救と、聖人になるためのお助とを與へてください」と、書いてありました。

私が、生徒に言語學を教へてゐるとき

「ドメニコとは、どんな意味ですか。」
と、申しますと、或一人が

「天主さまのもの。」

と、答へました。ドメニコは喜び勇んで

「靈父さま、僕は靈父さまに、僕を聖人にしてくださるやうに願ひ致しましたが、全く道理のあることであります。私の名前が、良くそれを語つてゐます。でありますから、どうしても天主さまのものとならなければなりません。」

と、申しました。

ドメニコは、この契約のために、學校を休んで、長い間お祈をしようとして私に申し出でしたが、考へて見ますと、それは、ドメニコの年齢や健康に良くないことが解りましたので、禁じました。

十 救靈に盡す熱心

聖人になるために、ドメニコが最初に勉めましたことは、他人の靈魂の救といふことであります。

なるほど、イエズスさまが、その尊い御血をお流しになりましたのは、人間の靈魂のためにでありましたから、そのため熱心に働くといふことはほんとに正直なことであります。ドメニコは、それが良く解つてゐましたから、屢次、かやうに申してゐました。

「若し、僕が、僕の總ての友達を、天主さまのものとする事が出来ませうならば、どんなに嬉しいことでありませう」
ですから、或時は、その友達に良い勸をし、或時は、友達が犯した過を正してやつたりなどしてゐました。

ドメニコが、いつもく恐れて居ましたのは、忘に天主さまの名を呼ぶ事でありました。道で、天主様に對し奉りての悪口を聞いた時は、心配して俯伏し、「イエズス・キリストは譽むべき御者であります」と、祈りました。或日、一人の友達が、道で帽子を脱ぎ、小聲で祈つてゐるドメニコを見て近づいて

「どうしたの」

と、尋ねました。

ドメニコ「君は聞きませんでしたか、あそこにある人は、天主さまの名を忘に呼びました。私はその側へ行つて、それを矯させようと思ひましたが、若しも他の悪口の源になつては却つていけないと思ひ、躬が心の中で「イエズス・キリストは譽むべき御者であります」と祈つてゐたのです」

と、答へました。

その友達は、ドメニコの品性と勇氣とに感心して、この出来ごとを、會ふ人毎に話しました。

或日、學校の歸路に、或人が恐ろしい胃瀆の言葉を口にしてゐるのを聞きました。ドメニコは、その人を氣の毒に思ひ、心に天主さまの御憐憫を祈りながら近づいて

「サーレスの聖フランシスコのオラトリオへ行く道を、どうぞ教へてください」

と、叮嚀に尋ねました。その人は、こんなもの柔かな少年が、ものを尋ねるので、心易く

「残念ですが、私は知りません」

と、答へました。するとドメニコが

「それでは、も一つお願い致したうございますが」と、云へば
 「云つてごらんない。出来ることなら致して上げませう」
 と、その人は答へました。

その時、ドメニコは耳許近く寄つて

「いくら怒つたからと云つて、あんな悪口は云はないで、その代に何か
 他のお言葉をおつしやつたら如何でせうか」

と、申しますと、その人は感心して

「なるほど、道理だ。これが私の悪い習慣だ。努力して矯正さう」
 と、答へさうであります。

或日のことでした。二人の少年が、聖堂の門前で喧嘩をしてゐました。

その一人が、イエズスさまの聖名をみだりに叫びましたから、ドメニコは
 これは大變と驅けつけて、和睦をさせました。そして悪口した少年の手を
 握り、聖堂の中へ連れて参りました。祭壇に近づき、跪いて

ドメニコ「今、犯した罪に就いて、天主さまに許をお願いします」

と、申しました。その少年は告白の祈を知らなかつたから、一所にそれ
 を誦へてやりました。それから

ドメニコ「今、僕が云ふことを反覆してください」

と、云つて、「イエズス・キリストは譽むべき御者であります。その聖名
 は、いつも譽むべき聖名であります」と云ひました。

ドメニコは、靈魂の拯救のために働いた聖人の傳記を、読みたく思つて
 居ました。

遠い國に居られる宣教師等を思つては、屢次其の話をし、その師等のために天主さまに祈り、聖體を拜領しました。

私は、ドメニコが

「靈界の爲めの僕等の援助を英國で待つてゐる人々の數は、どれだけあるか知れませんが」と、云ふのを聞いたことがありました。

又、

「僕は、力や徳があれば、直、其處へ行つて、良い模範と祈禱で以つてそれらの靈魂を天主さまのものとしたいと思ひます」と、云ひました。

少年に、信仰の教が行きとどかないと聞くと、ドメニコは、それを氣の毒に思ひ、時々友達に、斯う云ひました。

「僕は、他日靈父になつてから、ムリアルドへ行つて、少年等を集め、公教要理を教へたいと思ひます。そして、實例を話して、その少年等を聖人になす可く骨を折りたいたいのです。恐らく信仰を持たない少年が多いでせうから、それだけ地獄に落ちる少年が多い理由です」

こんな様子でしたから、オラトリオでは、少年等に熱心に公教要理を説き、場合に依つては何人にも宗教の話を致しました。

或日、ドメニコは、運動場で實例を引いて信仰の話を致してゐますと、友等が之を聞いて

「なぜ、君はそんな話をしますかと、尋ねると

「衆人の靈魂は、尊いイエズス・キリストさまの御血で救はれましたからです。僕等は皆兄弟ですから、互に愛し合はねばなりません。一人

の靈魂を救へば、僕の靈魂も亦救はれませう」と、ドメニコは答へました。

休暇の日も、ドメニコは、この熱心を捨てませんでした。學年の間に、貰つて貯めて置いた御繪、メダイ、十字架、書籍等を持つて行つて、良い友等に褒美としてやりました。で、足りないときは、オラトリオを出る前に、長上の人に願つて、斯うした物を貰つて行きました。

ドメニコが、其の村に歸つたときは、小さい友等も、大きい友等も、皆喜んで其周圍に集つて來ました。皆は、ドメニコのお話を一心に聞いた後、先に申したやうな土産を貰ふのでありました。ドメニコは、斯ういふ風にして、友等に公教要理、祈禱等を教へて、これ等の人たちをミサ聖祭に連



れて行きました。

ドメニコが、長い間、一人の友達に公教要理を教へてゐるといふことを聞きましたが、其の友だちに斯やうに云つたさうであります。

「君が、十字架の印を良くするならば、褒美としてこのメダイを呈けませう。そして靈父さまに頼んで、良い書籍を君に呈けるやうに願ひませう。けれども、十字架の印を良くせねばならぬのですよ。「聖父と聖子と聖靈の聖名に由つてアーメン」と、云ひながら、右の手を額から胸へ、それから左肩から右肩へ能く延ばして印すのです」

ドメニコは、救靈の印が、恭しくなされることを望んだのであります。その上、二人の弟の斡旋をし、これに讀書、習字、公教要理を教へ朝晩の祈禱をさせるなど致しました。

そして、二人を連れて聖堂に行き、聖水をもつて十字架の印をすることを教へました。暇があるときは、從兄弟や友達に教へることは勿論でありました。

村に歸つてゐるときも、毎日聖體を拜領しましたが、その時、だれか友だちが聖體を受けると、大いに喜びました。

十一 友達に對する言葉遣

天主さまの爲めに靈魂を得るといふことは、いつもドメニコの心から離れないことでありました。

遊のとき、ドメニコは、多くの友達の首でありましたが、その言葉遣はほんとに立派な美しいものでありました。

他人の話を、横取りすることは悪いことでもあります。話を横取りされてしまつて、ほんやり黙つてゐる友達に、ドメニコは、ラテン語、算術歴史等の學問の談をしたり、他の面白い話をしたりして、もの優しくしました。

友達が不平で、ぶつく／＼云ひ初めますと、直笑話をして、その友達を笑はせ、罪に落ちないやうにしてやりました。

ドメニコは、いつも快活で天主よりは無論、衆人より愛せられる少年で

ありましたから、宗教に無頓着な友達も、ドメニコの勸には良く従ひました。

或日、少年達が遊んでゐるとき、一人の男が寄つて来て、大きな聲で話し初めました。

この人は、其の側へ少年等を集めるため、面白い話を初めました。少年達は皆不思議に思ひましたけれども其の話が面白いので、寄り集つて来て一生懸命に聴き入つてゐました。その男は、悪い人でありましたから、宗教に就いていろ／＼な悪口を云つて聞かせました。四五人の少年は、この悪口を聞き難ねて、その場を立ち退きましたが、他の多くの者等は、面白がつて聞いてゐました。

そのとき、ドメニコがそこを通りかゝりまして、其の悪口を耳にしたので、皆に向ひ

「直あちらに行かねばなりません。僕等の靈魂を盗む此の卑しむべき人を離れなければなりません」

と、申しましたので、少年達は逃げて行き、其の悪魔の臣は、獨ほつちになり、這々の体で逃げて行き、再顔を見せませんでした。

悪い友達を、正しいものにする目的のため、オラトリオの多くの少年達が集つて、青年會を組織しました。其の中でも最も勇みに勇んで、この企に力を入れましたのはドメニコでありました。ドメニコは、十字架、御繪菓子、果物等を持つてゐるときは、運動場を廻りながら

「これを誰に呈けませうか」

と、云ふと、皆は

「ください、ください」

開くチリメ
 ラミ云ふ遊
 は短き五
 寸ばかりの
 棒を地に置
 きて、其の
 一端を長き
 棒に打ち
 落れ、あがり
 て、落ち來り
 地につか
 る。これを「
 好機を見
 始、打ちた
 る。棒を打
 又、打ちて
 遠く飛ばし
 たり遊ぶ。こ
 此の遊戯、九
 日本にも九
 州西北部に
 あり、土俗
 之をインテ
 ンコ云ふ。
 蓋し印天子

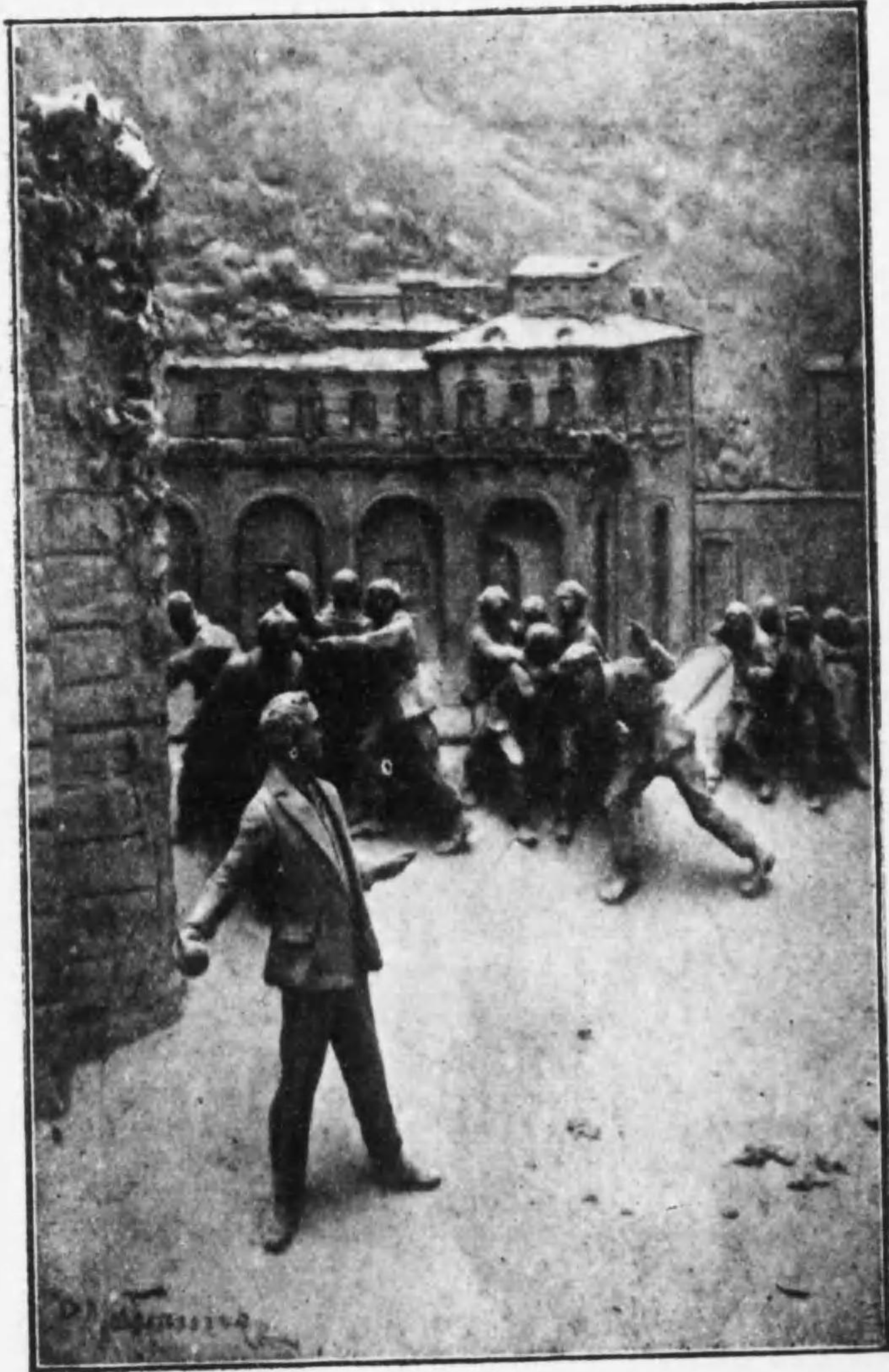


と、云つて、側へ集つて來ます。そのとき、ドメニコは
 「二寸待つてください、公教要理の一つの間に能く答へる人に呈けませ
 う」
 と、云うて、能く答へた人に呈けて居ました。

ドメニコは、種々な方法で友達を正しい善い人となしました。
 或日、少年等がチリメラといふ遊に夢中になつて居ました。暫して、

ドメニコは遊を止め、友達に向つて
 「この週の土曜日には告白をしますか」

と、尋ねますと、土曜日は、直今日明日といふほど近くもないからか、
 もつと遊を続けたいからか、それとも、ドメニコを喜ばせたかつたからか
 友達は



と、申しますと、友達は

「赦してください、善い準備が無かつたから逃げたのです」

と、答へました。ドメニコは

「心空しき者よ、君は悪魔の云ふことを聞きましたネ、ですから、僕は君が先程よりも、あはてゝゐることが善く解ります。善い告白をして御覧なさい。さうすれば、君の心は、必然、眞の喜に充つることでせう」と、申しました。

其の後友達が、告白して、ドメニコにお禮を云ひながら

「尤でした。大層心嬉しくなりました。これからは告白を善くするやうに心懸けます」と契約しました。

青年の集會には、往々、無禮、無學、又は不具者などの理由で、獨ほつちになつてしまふ少年があります。かう云ふ少年に對しては、また、それだけの慰方があります。けれども若しこの少年が全く見捨てられましたならば、苦は其處にあるものであります。

かういふ人達は、皆ドメニコの友達になつて參りました。ドメニコは、其の人たちに近づいて面白い話や善い勸等をして喜ばせたのであります。それで、たびく悪いことをしようと考へてゐた少年も、ドメニコの善い勸で善い立派な人の道を歩くことが出來ました。

こんなありさまでしたから、友達が病氣になると、だれもかれも、皆、ドメニコを其の看病に欲しがりました。苦しんでゐる人は、ドメニコに依りて大いに慰められました。

かやうに、ドメニコは、他人に對する愛の道を盡して、日一日と天主さ

まから聖寵を増して頂いてゐました。

十二 祈に對する愛。聖母マリアに 對する信心。聖母マリアの月。

ドメニコが、天主さまから頂いた大きな恵の一つは、熱心といふことでありました。どんな騒しい處に居ても、我が心を天主様に捧けて靜に祈りする事が出来ることでありました。ドメニコが祈つてゐるのを見ると、恰も天使のやうでありました。跪き、體を眞直にし、頭を少しばかりうつむけて喜に充ち溢れた顔は、聖アロイヂオのやうでありました。

このオラトリオに出来るる聖アロイヂオ會には、一八五四（安政元）年カイスといふ伯爵が、其の首となりました。伯爵が聖アロイヂオの祝日の聖祭に初めて與つたとき、熱心に祈つてゐる感心すべき一少年を見出しました。聖祭の後で、伯爵は、その少年はドメニコ・サウイオであつたこ

とを知りました。

ドメニコは遊のときも、良い書を読んだり祈つたりしてゐました。往々五六人の友達を聖堂に連れて行き、煉獄の靈魂のために聖母に祈を捧げました。

聖母に對するドメニコの信心は、大きなものでありました。毎日苦業を致しました。女の子の容姿など見つめることは決してなく、學校の往還は目を散らさぬやうに努めました。時には、道で勇ましく遊んでゐる友達を見ることもありましたが、出来るだけ、それが目につかぬやうに歩みました。家へ歸つたとき、一緒に歩いて來た友達が

「ドメニコ君！さつきの遊は面白かつたですネ」

と、申しますと、ドメニコは

「さうであつたかも知れませんが。けれども僕は見ませんでしたから良く解りません」

と、答へました。

或日、一人の友だちが怒つて

「目は一體何のために付いてゐるのか」

と、尋ねますと、ドメニコは

「他日、天國に行つたとき、聖母を見奉るために付いてゐます」

と、答へました。

ドメニコは、聖母マリアの聖心に對する熱い信心をも亦持つてゐました。聖堂に行くと、祭壇の前に跪いて

「僕の心から、悪い思を追ひ出してくださいませ。僕は、常に聖母の子

になつてゐるのでありますから、どうぞ潔白の徳をお與へください。
 そして、その徳に背くやうでありましたら、どうぞ死なしててください」と、祈りました。

毎金曜日には、必ず五六人の少年を連れて聖堂に行き、聖母の七つの悲のお祈りか、或は其のおん悲の連禱を唱へました。

ドメニコは、自が聖母マリアを愛し奉つてゐましたから、他人にも聖母を愛し奉らせることが出来たときは、大いに喜びました。或寒い日、一人の友達に

「聖母に對し奉る祈りを唱へては どうですか」
 と、尋ねましたが、友だちは

「寒くて」



と、云つて首を振りました。ドメニコは、其の手袋を友達に貸して後、連れ立つて聖堂に入つたこともありましたが、ときには、着てゐるマントを貸すことすらありました。かうした勇ましい信仰の心を誰が感心しないものがありますか。

ドメニコの、わけても熱心な信心を見るのは、五月の聖母月でありました。ドメニコは一ヶ月の間、毎日信心の務をするために、或友達と會を組織しました。他の友達には、聖マリアさまに對する信心を増させるために種々な實例を話して聞かせました。運動場で遊んでゐるときも、聖マリアさまの話しを能く致しました。

「その月には、善い告白をして、聖體を受けなければなりません」と、友達に云ひ聞かせ、躬模範を皆に示しました。

聖母マリアに對し奉るドメニコの優秀れた信心を物語る面白いお話があります。

寢室を同じくする友達が集つて、聖母マリアさまに捧げる美しい小さな祭壇を作らうと致しましたことがありました。

ドメニコは、之を作るために一生懸命に働きましたが、お金が必要になりましたとき

「残念なことです、お金は一厘もない。困つたことです。しかし、その代に品物を出してお金に代へませう」

と、云つて、長上の許を得、先に貰つてあつた書物を持つて来て、友達に

「お金がありませんから、これを出ませう」と、申しました。

これを見て友達は感心し、皆種々の物を持つて来て、それで富籤を作つてお金をこしらへることが出来ました。

祭壇が出来た後、少年達はそのお祭を立派にやる心算でしたが、期日の前日になつても未だ飾つけが充分に出来て居りません。

そこで、ドメニコは友達に

「僕が夜中寝ないでも飾つて宜いですが」

と、申しました。けれどもドメニコは、この間まで、病氣でありましたから、長上の人が之を止めました。そこで、ドメニコは友達に

「それでは、飾つけが済んだ後で、どうぞ僕を起してください。さうすれば、朝最初に起きて、祭壇の聖母に最初に御禮をなして最初に聖母を讃め奉ることになりませう」

と、申しました。

十三 告白と聖體の祕蹟に對し奉る愛

青少年にとつて、必要なる救の道は、告白と聖體の祕蹟とであります。このことは、昔からの経験を觀れば善く解ることでもあります。この祕蹟を大切にする人は、善い人になることが出来、年老いてからも人の模範となつてゐます。これは、學校の先生も、その生徒も良く解つて頂きたいことでもあります。生徒は之を行ひ、先生は其の生徒に之を勸めるやうに心掛けて頂きたいものであります。

ドメニコが、このオラトリオへ来る前は、村の學校に居りましたが、其處では、一ヶ月に一次この聖い祕蹟を受けるといふ規則でありましたので初は、それに従つてゐました。けれども後には、屢次受けてゐました。

或日の説教で「青少年達よ、若し諸君が、いつも天國の道を歩み續けた

いならば、三の事柄を特に注意なさい。即、第一、屢次、告白をする事第二、善い準備を以て聖體を受けること、第三、總て靈的のことを話すため、聽罪靈父を一人選み、之を理由なしに換へぬことである」と聞きました。ドメニコは、これが善く解りましたから、さうしようと決心致しました。

オラトリオにては、ドメニコは、一人の聽罪靈父を選んで、決してこれを替へませんでした。聽罪靈父に、我が良心を善く知らせるやう總告白をしました。

初は、十五日毎に告白して、聖體を受けましたが、其の後、毎週爲すやうに心掛けました。

聽罪靈父も、ドメニコの燃ゆるやうな信仰心を視て、一週に三次聖體を拜領させましたが、その年末には毎日許しました。

ドメニコの聽罪靈父に對する信用は、眞に側りきれぬ位でありました。告白の外にも、有らゆることに就いて相談しました。

友達が時々ドメニコに

「聽罪靈父さまを替へることは宜いことです」

と、勧めましたが、ドメニコは之を聽き入れないで

「聽罪靈父さまは、靈魂上のお醫者さんですネ、病氣のとき、理由なし

でお醫者さんを替へることが宜くないことであるやうに、聽罪靈父さ

まを謂なしに替へてはいけません」

と、云ひました。然しドメニコの聽罪靈父は

「大事な祝祭のあるとき、聽罪靈父を替へることは宜いことです」

と、云ひ聞かせましたとき、初めてそれに従ひました。

またドメニコは

「僕は悲しいときは、聽罪靈父のところへ行つて、天主さまの聖旨に就いての勸を受けます。イエズス・キリストは、聽罪靈父を全く天主様の代理であると仰せなされました。又僕は、この世の寶が欲しくなつたときは、いつも直に聖體を受けます。聖體は、イエズス・キリストが、永遠の聖父に捧げ給うた眞に神聖な御身體と御血と御靈魂とであります。それで、僕は幸福になるためには、何が必要であるかと聞かれたならば、この世の中には必要なものは何もありません。たゞ一つのことが必要であるばかりであります。それは、信仰の眼をもつてのみ視ることが出来るあの祭壇に隠れて居給ふ御者を眺めることである」と、申しませう」

と、云つて楽しんでゐました。

かうした思の中に、ドメニコは楽しくくらししてゐました。是は、其の

の愉快の心持や、また其の行爲の勇氣の源にもなりました。

實に、ドメニコの品行は、どの點を見ても正しいものでありました。私がドメニコの友達に

「ドメニコ・サウイオが、オラトリオに居た三年の間、何か、善く無かつたことがありましたなら、どうぞ聞かせてください」

と、申しますと、其の友達は皆

「善くないことなどは一つもありません。ドメニコに何かの徳が缺けてゐるとは、どうしても云へません」

と、答へました。

ドメニコが、聖體拜領のときの信仰深い熱心さは、眞に珍らしいものでありました。聖體拜領の前日は、床につく前

「尊い天主さまの聖體は讃むべき哉」

と、云つて祈りました。

その日になりますと、善く聖體拜領前の祈を爲し、拜領後は、際限なく感謝の祈をしました。呼び知らせなければ、朝飯も、遊戯も、學校のことも皆忘れて感謝の祈をしてゐることが屢次でありました。

ドメニコにとつては、祭壇の前に居ることは、何より大きな慰樂でありました。毎日必ず聖體を禮拜し、また友達を連れて来て、もろともに禮拜しました。ドメニコが最も好んだ祈は、「罪人のために聖母に祈る文」でありました。

聖體を拜領する熱心の火を、益々自分の心に燃すため、ドメニコは一週間の日割を定めました。

日曜日 一天主たる聖三位を讃め奉る。

月曜日 我が恩人のために祈る。



火曜日 聖ドメニコ及、我が守護の天使を仰ぎ奉る。

水曜日 罪人のために、聖母の七つの悲に對し奉る祈をなす。

木曜日 煉獄の靈魂のために祈る。

金曜日 イエズス・キリストの受難を思ひ奉る。

土曜日 聖母を讃め奉り、善死を遂げるために其の保護を願ひ奉る

ドメニコは、また道にて、病人の爲めに運び奉らる、聖體に出會ふときは、たとひ雨にて道が、どろ／＼になつてあつても、跪いて禮拜しました。若し時間のあるときは、聖體の御伴を致して居りました。

或雨の日、泥だらけの道にて、聖體に出會ひました。其處は跪く場所は、無論、無かつたから、泥の中に跪いて拜みました。
一人の友之を見て

「天主さまは、そんなことは御命じになりませんから、泥で着物を不潔にすることは、良くないことです」

と、答めました。するとドメニコは叮嚀に

「膝も着物も、皆天主さまのものですから、天主さまの御前に在つてはどこであつても之を使用せねばならぬと思ひます」

と、答へました。

また或日、ドメニコが聖體に出會つたとき、跪いて禮拜して居るのにその側には、一人の軍人が、ほんやりとして起つて居ました。ドメニコは軍人に忠告するのを遠慮して、懐からハンケチを出し、これを軍人の前に敷いてやりました。軍人は困つたやうな顔をして、ハンケチの側に跪きました。

聖體の大祝日には、儀式の服を着て、聖體の行列に加はることを、甚

喜びました。

十四 苦業

ドメニコは、まだ少年で、その上體が弱くありました。然しその心は、眞に清いものでありましたから、苦業の必要はあるまいと思はれますが、苦業をせねば潔白の徳は守られないといふことを悟りました。ドメニコには苦業の道は花咲き匂ふ楽しい道のやうに思はれるのでありました。

私は茲で、ドメニコの苦業に就き、他人の悪罵や、種々な悪事を赦したこと、聖堂、學校、運動場等に在るときの善き行等を物語る心算はありません。ドメニコが其の體に對して行つた苦業をお話し致したいのであります。

ドメニコは、聖母を讃め奉るために、毎土曜日に麵麩と水とのみにて、食事を濟ませることに決心致しました。然し、これは、聽罪靈父から禁ぜ

られました。また四旬節の大齋を守らうと致しましたが、學校で止められました。これは、其の體が弱かつたからであります。

そこでドメニコは「それでは一體何をしたら宜いのでせうか」と考へました。

暫考へた後、他の苦業を考へましたが、それも皆禁ぜられました。

ドメニコは困つてしまひ、他の工夫を致しました。秋から冬に移るとき寒が強感受られて來ても、蒲團を増しませんでした。一月になつても夏の夜具を着て苦業を試みました。

或朝、少し病氣の氣味でドメニコは床についてゐました。私が見舞つたとき、寒で震へて居るドメニコを見て

「ドメニコよ、どういふ理由で、こんなことをしますか。凍えて死ぬ心算ですか。」

と、尋ねますと、ドメニコは

「御安心なさい。決して寒では死にません。イエズスさまは、ベトレヘムやカルワリオ山では、今の僕より、もつと寒かつたのであります。」

と、答へました。其の時、私はドメニコに、「どんな苦業も許し無くして爲てはなりません」と堅く禁じました。

ドメニコは、苦業の出來ぬのを甚心配致しましたが、命令に良く従つて止めました。

或日、心配さうに

「どうも困ります。救主は、苦業がなければ天國に入ることは出來ぬと仰せられましたが、僕には、どんな苦業も禁ぜられて居ます。一體僕の行く天國は、どんな處でせうか。」

と、申しますので、私は

「君の苦業は、服従することに在るのです。それが天主さまの聖旨ですよ。」

と、答へてやりました。そのときドメニコは

「どうぞ、他の苦業をも許してください。」

と、申しますので、私は

「よろしい、では悪罵を堪忍すること、暑、寒、風、雨、疲と天主さまが君に與へ給うた病氣とを良く堪へ忍ぶことなどを許しませう。」

と、申してやりました。するとドメニコは

「それは宜いことですが、當然のことではありませんか。」

「當然のことでも、天主さまに捧げ奉れば功德になるのです。」と、私は答へました。

ドメニコは、これを聞いて初めて安心してました。

十五 制 慾

初めてドメニコを視る人は、その優秀しい氣立を見て

「これは、天主さまのお恵でせう。」

と、申すのでありました。ドメニコの教育に力を入れた先生は

「天主さまのお恵に助けられて居る人の大きな力があります。」

と、申しました。

ドメニコは、其の目が、甚、感じ強いものであつたので、これを制するために大いに骨を折りました。

或友達に向つて

「僕が初めて目を制することを契約し實行したとき、甚、疲れまして、さうして頭が ひどく痛みました。」

と、申しました。ドメニコは悪い物に目をやるやうな事は一つもせぬやうに慎しみました。屢次に

「目は二つの窓です。この窓は、通らせようとすれば何でも通ります。ですから、天使でも、悪魔でも、其處を通らせて、心の主とすることが出来るのであります。」

と、申しましたこともありました。

或日、町の一青年が、繪の書いてある新聞を持つて来て、わいしく云つてゐました。ドメニコは、恐らく、聖い繪であらうと思つて近づいて見ますと、驚いたことには醜い繪ではありませんか。そこでドメニコは新聞を取つて破り捨てましたので、皆は、びつくりして互に顔を見合せて居ました。

その時、ドメニコは



「皆さん、僕達の目は、天主さまが御躬でお創りになつた聖い眞善美の事物を見るため與へられたものですのに、君達は、そんな醜いものを見るために目を用いますか。説教で聞いたことは忘れてしまつたのですか。救主は、悪い目付一つでも、靈魂は濁ると、仰せられ給うたではありませんか。」

と、申しますと、友達の一人が

「たゞ笑ふためですから」

と、辯解をしますので、ドメニコは

「笑ふため……それでは、地獄へ行くのに、笑ひながら準備をして、地獄へ行つた後でも、尙、笑つて居られますか。」

と、答へますと、他の者は

「けれども僕達は、この繪を、そんなに悪い繪とは思ひません。」

と、申しました。そこでドメニコは

「何を云ひますか。それは悪い繪です。そんなものを見る事が悪くなくつて、どうしますか。では一體君達は、かうした繪を見馴れて居るのですか。若しそんな悪い習慣があつたなら、僕は君達を訴へますよ。」と、言ひ聞かせました。少年達は、この言葉に驚き黙つてしまひました。

ドメニコは、心愼まやかな人でありましたから、話すときも一層注意して謹みました。人の議論は黙つて之を聞いて居ました。ドメニコは學校や聖堂等の、務を守る處では、無駄口一つ云はなかつたと、其の先生や長上の人が語つて居ります。

或日、一人の友達が、ドメニコの勸を聞かない上に、腹を立て、打擲しました。ドメニコは、其の悪い人よりも、丈は高く力は強くありました。

が、少しも抵抗をしません。でも其の顔色は少し變りましたが、怒を、ぐつと抑へて

「僕は、君を心から赦します。けれども君は悪いことをしましたネ。どうぞ他の者には、こんなことはしてなりません。」と、説き聞かせました。

ドメニコの制慾に就いては、まだく、夥多のお話があります。私は例を引いて、もう少し話を續けませう。

冬になると、ドメニコの指は、凍傷で太く腫れますので、甚、苦しみました。けれども、どんなに苦しさか激しくても、一回も歎いたことはありません。それどころか、却つて楽しさうに見えました。いつも

「これで、體が丈夫になるのです。」

と、云ひました。體とは、靈魂のことを云つて居るのであります。或友達が云ふのに、ドメニコが時々釘で體を傷つけて居ましたのは、イエスさまに似るためであつたのださうであります。

其の學校でも、中には不平を云ふ少年がありました。その少年は、聖式や、規則や、夜の休息や、食物などに就いて咥くのであります。かういふ少年達の教育は、全く先生等の苦心斜ならぬものであります。一人の咥いた不満足は、皆に擴がつて行きますからであります。

けれども、ドメニコは、まるっきり、異つて居ました。暑、寒に咥くことなく、天氣の善し惡しに關らず、喜の心に充ち満ちて居ました。食事に何が出て、いつも満足して食べました。かやうな動機に感心すべき工夫を凝して苦業を行ひました。誰か

「この食物は生煮だ。これには塩がない。」

など申しますと、ドメニコは却つて

「これは、僕が最も好きなものです。」

と、申すのでした。友達が、食堂を出た後に、食卓の上に残つて居るパンや、床に落ちて居るパンを拾つて食べることは、ドメニコには珍しいことではありませんでした。これは、ドメニコが食物を貧るからではありません。何故ならば、時々其の旨い食物を友達に與へるのでしたからであります。

「何故、こんな落ちた汚い物を食べますか。」

と、問はれると

「この世で、僕達が持つ總ての物は、皆、天主さまのお恵の物です。食物は、聖寵に次いで天主さまのお恵です。ですから、僕達は、どんな小さな食物でも、天主さまに感謝せねばなりませんし、また注意も

せねばなりません。」

と、答へました。

ドメニコは、また友達の靴を磨いたり、着物を清潔にしてやつたり、病人の斡旋をしたり、その室を掃除してやつたりすることが大好きでありました。

「人は、躬、出来ることはせねばなりません。僕は大了たことは出来ませんが、僕に出来ることは、皆天主さまの光榮のために盡さうと思つて居ます。天主さまは、御憐深い御者でありますから、必然、かうした貧しい獻物をお受けくださるのであります。」

と、ドメニコはいつも申してゐました。

かう云ふやうに、ドメニコは、好かぬものを躬食べ、旨いものを人にやり、目を嚴重に守り、意志を磨いて苦業を續けました。

私は、ドメニコの苦業に就いて他の夥多の事は、もう申しませんが、今お話した事のみで、その苦業と愛の精神とを知るに充分であらうと思ひます。

十六 無原罪の聖マリヤ會

ドメニコの全生涯は、最尊きマリヤさまに對し奉る敬心の練磨といふことが出来ます。ドメニコは、聖母に對し奉りて尊敬を拂はねばならぬ場合には、必ず、それを果してゐました。一八五四（安政元）年、教皇ピヨ九世が、聖母マリヤの無原罪の御孕を、信仰箇條と御定になつたとき、ドメニコは、聖會によつて天の元后への尊き名譽が、永久に僕等の中に在るやうにと熱心に祈りました。

ドメニコは

「僕は、聖マリヤさまを讃め奉る爲め、何か爲したいのでありますが、早く、それをせねば、する時が無くなつてしまひませう。」

と、申してゐましたが、やがて忠實な友達を選んで、「無原罪の聖マリヤ



會」を組織致しました。その目的は、現在は勿論、臨終の時、特別に天主様の御母聖マリアの御保護を頼む爲めでありました。ドメニコはその爲め二つの方法を勧めました。一つは、無原罪の聖母を讃め奉る爲め敬神の行をする事、一つは屢々聖體を受け奉ること、でありました。一八五六（安政三）年六月八日、即、其の死ぬる九ヶ月前、この契約を聖マリアの祭壇の前で読み上げました。

その契約を知りたい人がありませうから、私は此處に喜んで之を掲げませう。

吾等サウイオ・ドメニコ……（此處に他の人々の名前が、續けて書いてあります）が略します）生涯の間、又臨終の時、最も幸なる無原罪の聖マリアの御保護を求め、且、始より終まで、聖母に仕へ奉る爲め、六月八日に吾等は

アロイデオ
・コモロは、
一八一八(文政元年)
伊太利村に
生れ、立派な
信仰をもつて
九(天保一三
〇)年、二
十二歳に於
て、キネリ
町の神學校
で死にまし
た。この人
の傳記も尊
者ドン・ボ
スコ師の著
でありませ

皆、告白と聖體との兩秘蹟を受けました。そして、聖母に對し奉る吾等の孝行と衰へざる信心とを表す爲めに、靈父の許可を得て、聖母の祭壇の前に平伏し、出來得る限りアロイデオ・コモロに一致す可く決心致します。

契約

- 一 オラトリオの規則を厳しく遵ります
 - 二 友達を誡めるに禮儀を以つてし、言葉と特別な好い模範とを以つて其の友達に善行を勧め完全なる人の道に導きます
 - 三 時間を徒らに送りませぬ
- 吾等が契約しましたことを、全く守るには、左の規則に就いて、校長靈父の許可を受けねばなりません

- 1 絶對に長上を頼にし、長上に對しては、完全なる從順を盡す事を第一と致します
- 2 我等各自の務を盡すことは、吾等の最も大切なる行であります
- 3 互に愛し合ふことは、吾等の魂を一つにし、他人を愛する基礎となります。他人に對し、誠が必要のときは、柔和の心を以つて之を致します
- 4 毎週一定の日の半時間は、皆集つて聖靈に祈り、聖なる讀書を以つて、信心と善徳とに資し以て會の進歩を計ります
- 5 咎めねばならぬ缺點は、密かに之を誠しめます
- 6 堪忍を以つて友を赦し、うるさい人の迷惑を忍び、吾等の中に在る總ての悲しい事を、無くするやうに心掛けます
- 7 爲すべき特別の祈は、之を定めませんが、我等各自の務を果して後

残餘の時間があつたならば、其の時間を祈禱の爲めに用ゐます。これは靈魂の爲め最も利益あることであります。

然れども、左の信心の行を定めて置きます

第一項 出来るだけ屢次秘蹟を受けること

第二項 毎日曜日、大祝日、九日の修業、聖マリア、オラトリオの

保護者の祝日等に際しては、聖體を受け奉ること

第三項 重大なる妨がない限り、毎木曜日にも聖體を受け奉ること

堅忍のお恵を戴く爲め、毎日特別にロザリオの祈をし、吾等の會の

榮を聖母に頼み奉ります

10 聖母を讚美し奉る爲め、毎土曜日、特別なる行を致します。或は、

其の汚なき御孕を讚美し奉る爲め、キリスト信者として何事かを行

ひます

11 祈禱會、聖讀書會、勤學室、學校に於いては、猶好い模範となるべ

き行を致します

12 最も忠實に、天主さまの御言葉を守つて、説教で聞いたことを熟く

考へます

13 誘惑が攻め易い最も善い時期は、怠惰の思が動いてゐる時ですから

我が心を守る爲めに、時を徒らに費しません

14 我等各自の務を終へた後は、善い書を讀んだり、祈をしたりして、

残餘の時間を送ります

15 鬱散をするのは、食時、勤學の後にします

16 躬を能く導いていたゞく爲め、利益になることがありましたならば、それを長上に告げます

17 長上から戴いた許は、之を悪く用ひません

- 18 長上ちやうじやうが定めた食物しょくじつは、喜んで受け、之これに就ついて、不平ふへいを云いつたり又は友達ともだちに云いはせたり致いたしません
- 19 この會くわいに入會にうかいしたい者は、第一だいいちに告白こくはくの秘蹟ひせきを以もつて良心りやうしんを清きよめ、天使てんし達の聖糧せいりやうをいただいて、一週しゅうかん間我わが心こころを審査しらべねばなりません。そして、規則きそくを善よく讀よんで、天主てんしゆさまと汚けがれなき聖母せいぼのため、それを守まもるやうに決心けつしんせねばなりません
- 20 志願者しげんしゃが本會ほんくわいに入る日ひ、本會員ほんくわいじんは、聖體せいたいを戴かき、忍耐にんたい、從順じやうじゆん、天主てんしゆさまの眞まことの愛あいの三さんつの善德ぜんとくとを、その志願者しげんしゃに與あたへ給たまふ可べく祈いのります
- 21 本會ほんくわいの保護者ほごしゃは、汚けがれなき聖母せいぼにてましますれば、會員くわいじんは、聖母せいぼの聖牌メイタルを徽章きしやうとして首くびに掛かけ奉たてまつります
- 22 聖母せいぼに對たいし奉たてまつる眞まことの考行かうかう、絶對ぜつたいの信賴しんらい、特別とくべつの柔なしさ、衰おとろへぬ信心しんじん

- 23 とあれば、困難こんなんに際さいしては、堅かたく忍しのぶことが出来でき、我わが行なは嚴げんしく之これを審査しきすることも出来でき、他人たにんには愛あいの心こころを強つよくする事も出来できます而しかして之これを以もつて、何事なにかに就ついても吾等われらを完全くわんぜんにするやうに務つとめます
- 24 イエズスとマリアとの聖名せいなを、先づ心こころに深ふかく彫ほりつけ、書籍しよせき其その他たいつも目めにつき易やすい物ものの上に、書かき印しるし置おくやう會員くわいじんに勸すすめます
- 25 靈父れいふが、この規則きそくを善よくお査しらべになつて、其その御考おがを述のべて頂いたくやうに、お願ねがひ致いたします。そして、靈父れいふの思召おぼしめしには、皆絶對みなぜつたいに従したがふやうに契約けいやくします。勿論もちろん靈父れいふは、此この規則きそくを、思おもひのま、に改あらためることが出来できます
- 26 本會ほんくわいを設たけたのは、聖マリアさまの御示おしめしでありましたから、聖マリアさまは、御自身ごじしん本會ほんくわいを祝福遊しよくふくあそばれます。聖マリアさまは、吾等われらの希望きぼうに光ひかりを與あたへ、志こころざしや望のぞみを聴きき、其その御衣おしろしの下したに吾等われらを護まもり、吾等われらは

其の御保護に籍り奉りて強くなる事が出来ますから、吾等は、この幻の世の暴風雨と戦ひ、地獄の敵を攻め降す可く力を盡します吾等は聖母より慰められ奉り、友達には其の好い模範となり、長上には其の喜となり、聖母には可愛がられ奉る少年になる事を勵みます他日、若し、吾等が司祭となつて、天主様に仕へ奉ることを天主がお許しになりますならば、その務を、最も秀れた奮勵努力で果します、そして我が力に頼らず、天主さまのお助のみに信賴し、天主さまに仕へ奉る者のため用意し給へる永遠の御褒美を受け奉る可く希望し臨終に際し、聖母の臨御になり給ふことによつて慰められて、此の涙の谷を立ち去ることを希望します

果して、校長靈父は、この規則を大いに御喜びになりました。そして、

これを、熟と考へ、左の條件を附けてお許しになりました。

- 1 此の契約は、誓となすことは出来ません
- 2 此の契約を破つても、罪になることはありません
- 3 教會で、聖堂の掃除や、又無學な少年に公教要理を説くやうな愛の行をもしなさい
- 4 會員中、順序を定めて、日々聖體を受け奉る様に週間割を作りなさい
- 5 長上の許可なくして、特別な信心の行を定めてはなりません
- 6 汚なき聖母マアリと、聖體とに對し奉る信心を擴めることを第一の目的としなさい
- 7 志願者が、會員となる前に、アロイヂオ・コモロの傳を讀ませなさい

十七 少年ガビヨ・カミロの友情

誰でも、ドメニコのお友達でありました。

ドメニコを愛せぬとしても、何人も彼れの善徳には尊敬を拂ひました。それは、ドメニコが、皆と親睦したからであります。悪い友達を天主さまの聖光に浴びさせようとする努力が、餘り強いので、少し休むやうに長上から勧められる程、ドメニコは高い／＼善徳を持つてゐました。

ドメニコは、靈魂に利益を得るため、善遊、懺散、善物語等を利用しました。

けれども、無原罪の聖母の會員は、先に書きました如く、特別に時々集つて靈的演説會や祈禱會を開くのであります。この會は、勿論長上の人

を首に戴いて居ましたが、組織した人は、實はドメニコでありました。

この會には、九つの大祝日の祝法、一週の間、聖體を拜領する日を分けること、誠を必要とする少年を、各自の保護の許に置くこと、守るべきことなどが定めてありました。

ドメニコと特別の友情あつて、この會の會員であつた少年に就て申したのでありますが、まだ生きてゐる者が夥多ありますから、此處には、もう天國に行つてしまつてゐる二人に就いて申しませう。それは、ガビヨ・カミロとマッサリア・ジョハンニとの二人であります。ガビヨは、凡二ヶ月ばかり私達と一緒に住んだばかりでありましたが、やはり善徳の高い少年でありましたから、友達に善く懐かれました。

ガビヨは、信仰深く、繪と彫刻の才能がありましたので、其の市の役人は、學資を出してトリノへ送つて學問させたのであります。

トリノへ来る前、大病を患ひましたので、此のオラトリオへ來ても元氣が餘りなく、いつも知らない少年達の中に交つて、なつかしい郷里や両親のことを考へてゐました。ドメニコは之を見て、近づき慰めて云ふ

ドメニコ「ネ君、この夥多の人の中で、君は知つてゐる者は一人もないのですネ。」

ガビヨ「さうです。けれども遊び戯れてゐる少年達を見ると、僕も喜しくなります。」

ドメニコ「君のお名前は。」

ガビヨ「ガビヨ・カミロと云つて、トルトナ市から來た者です。」

ドメニコ「齡はおいくつですか。」

ガビヨ「十五歳です。」

ドメニコ「君の顔は悲しさうに見えますが、何故ですか。御病氣でしたか。」

ガビヨ「さうです。病氣でした。死ぬるまでも患ひまして、未だ充分に回復してゐません。」

ドメニコ「早く回復して健康になりたいものですネ。」

ガビヨ「僕は、天主さまの思召に協つてゐればそれで宜いのです。」

この最後の言葉を聞いて、ドメニコはガビヨが普通の信仰の人でないことを知り、大いに喜びました。話を續けて

ドメニコ「天主さまの思召に協ふには、完全な人にならねばならぬのですから、君は、それでは聖人になりたいのですネ。」

ガビヨ「さうです。僕は、それを甚望んでゐるのです。」

ドメニコ「それは宜い！それは宜い！君は僕等の良い友達となり、聖人になるため必要な種々のことを行つてゐる僕等の朋にお入りなさいネ。」
ガビヨ「君の云はれることは、眞に嬉しいことです。けれども、僕は行

はねばならぬことを知つて居ません。」

ドメニコ「それはネ、梗概を申しますと、僕等が愉快な心持の少年になり、天主さまの聖寵と、心の平和とを奪ふ罪を大敵として防ぎ、完全に我等の務と信心の務とを盡すことです。今日から「愉快な心で、天主さまに仕へ奉りなさい」といふ訓を思ひなさい。」

この會話は、ガビヨにとつて甚大な慰藉となりました。その日から、ガビヨはドメニコの忠實なる友達となつて、漸々その善徳に一致して參りました。けれども、全く癒しきつて居なかつたガビヨの病氣は再發して、醫者の心盡しも其の功なく、二三日後には大いに悪くなりました。而して一八五六年十二月三十日、謹んで最後の秘蹟を受けて、其の靈魂は天主さまのお側へ參りました。

ガビヨが病氣になつたとき、ドメニコは屢次ガビヨを訪ひ、長上の許

一八五六年
我安政三年

があるときは、その枕許で夜を共に送つてやりたいと思つてゐました。ガビヨが息を引き取つたとき、ドメニコは直馳けつけ、其の容姿を眺めて涙ぐみながら

「ガビヨ君よ、君が天國に上つたことを、僕は堅く信じて居ます。どうぞ僕のためにも天國で席を設けて待つてゐてください。僕は、常に君の友達でありますから、天主さまが僕に生命をお與へくださつてゐる間はいつも君の永遠の休息のために祈つてゐます。」と言ひました。

それから、友達を伴れて行つて、長い間死者ガビヨの爲めの祈を唱へました。又、ガビヨのために、良い友達を誘つて聖體を受け、躬は幾回も之を受けました。

ドメニコは、其の友達に

「友等よ！僕等の死んだ友達の靈魂を忘れないやうにしませう。ガビヨ

君が天國に昇つたことを、僕は堅く信じますが、でも、其の爲め何時も祈の絶えぬやうに致しませう。今僕等が、其の爲めにすることを、他日他人が僕等の爲めにもしてくれるやう、天主さまに祈りませう。」

十八 少年マッサリア・ジヨハンニ

この友情

ドメニコとマッサリアとが、長く交際することが出来たら、いがはかり親しいものとなつたでありませう。兩人同時に此のオラトリオに來たのであります。その郷里は近く、兩人共聖人となり、司祭となることを熱心に望んで居ました。

或日、ドメニコはマッサリアに

「司祭になることを望んだのは、善いことでしたが、僕は、まだ、その職に堪える善徳が足りませんから、大いに力を入れねばなりません。」と、申しました。マッサリアは

「尤です。けれども、僕等が出来るだけ力を盡すならば、天主さまは

聖寵を御與へくださされて、僕等はイエズス・キリストの使者となることが出来ませう。」

と、答へました。

とかくする中、復活大祝日が来て、他の友達と共に始めて默想會を開きました。これが終つた後、ドメニコはマッサリアに

「僕等二人は、共に靈魂上の眞の友達になることを心から望みます。で今後は靈魂上の利益の爲めに、互に誠め合ふやうにしませう。若し君が僕の缺點を見付けたら、僕が之を改めることが出来るやうに誠めてください。そして、僕に出来る善い行があつたなら、どうぞ之を勧めてください。」

と、申しますと、マッサリアは

「この契約は、君には必要がないかも知れませんが、僕は喜んで之を致

しませう。君も善くお解りのことですが、僕は歳も少なく、又、學問も優等とは申されませんから、随分と危険があります。どうぞ君は僕に種々注意してください。」

ドメニコは、にこ／＼して

「そんなに謙らないで、互に助け合つて行きませう。」

と、申しました。

その日から、ドメニコとマッサリアとは、眞の心友となりました。この二人の愛は、善徳の上に築き立てられたものでありましたから、いつまでも續きました。二人は、互に良い模範、良い勸告をなし合つて一心に助け合ひました。

學年が終ると、生徒達は、なつかしい郷里へ歸り、両親と共に休暇を過ごすことを許されます。學問に勵み、信仰の務を一層善く果したい者は、



オラトリオに止つて居ます。止つた者の中に、ドメニコとマッサリアとが居ました。私は、兩人の親達が随分彼等の歸省を待つてゐるのを知つてますし、彼等兩人にとつて休養も亦必要でありましたから、私は

「何故、家へ歸りたくないのですか。」

と、問ひますと、兩人は答へないで笑ひ出しました。私は

「妙な人達ですネ、どうして笑ふのですか。」

と、尋ねますと、ドメニコは

「僕達は、兩親が一日も早く僕達を見たがつてゐることは熟知つてゐます。僕等も、亦、兩親をこの上なく愛し、一刻も、早く會ひたいのでありますが、小鳥が籠の中に居るときは、不自由は不自由ですが、それを狙ふ悪い鷹の危険から護られてゐます。籠から自由に放たれるときこそ、鷹の爪に繋るのであることを僕達は熟知つてゐますから

であります。」

と、答へました。

マッサリアは、一生の間、善くドメニコに倣ひましたから、若し其の善業を此處に書きませうとしますれば、ドメニコ・サウイオに就いて書いた夥多のことを反覆さねばなりません。

マッサリアは、體が丈夫で學問が善く出来ました。中學を終へて神學初步の試験に及第しトンスラの品級式を受けて其の望の如く司祭服を身に著けましたが、残念なことには二三ヶ月の後、苟且の風邪が因で、學問を止めねばならなくなり、充分體を恢復させるため、両親はマッサリアを郷里へ伴れ歸りました。郷里に在る間、かやうな手紙を、ドメニコに贈せました

親愛なる友よ

著者不明
 して措くが
 妥當ならん
 蓋し De T
 imitatione
 Christiani Lib
 3. Cap. 15. に
 Da nihil...
 ...nesciri in
 hoc saeculo
 10. 2. ありは
 なり。茲に
 單に Kemp-
 pis がある
 は S. Tho-
 ma Kemp-
 等の他の書
 なるかも知
 られず。或
 人は云へり

祈をするとき、僕を憶ひ出してください。又聖體を拜領するとき、特別に僕を憶ひ出してください。天主さまの内にて僕を一心に愛してください。この世に、長い間、一緒に居られなくとも、何日は又親しく一緒になつて、聖い永遠の國に共に喜び合ひませう。友達と會員とによろしく。天主さまが、いつも君と共に在らんことを祈ります。

君の忠實なる友

マッサリア・ジョハンニ

ドメニコは、病める友達の望を優に協へてやりました。其の送つた小包には、左の情溢る、回答が添へてありました。

親愛なるマッサリア君よ

Gloria
 De profunodis

お手紙嬉しく拜見致しました、これは君が元氣で保養してゐる證據です。君が郷里へ歸つてから、暫御通信がありませんので、僕達は君のためグロリア（榮光の聖歌）か、デ・プロフンヂス（葬式の聖歌）かどちらかを唱へねばならぬかと迷ひてゐました。君の御依頼の物は皆、今送ります。ケンピスは良い友です。熟く讀んで、それを實行するやうにお勧め致します。

君は、僕達のやうに信心の務を行ふ便利が欲しいのですネ、尤です。僕も、モンドニオに居る頃は、同じ思を致しました。その頃、僕は、出来る限り多くの友達を伴れて、毎日聖體を訪問して、我が務を果さうと心掛けました。ケンピスの外に、聖レオナルドの「ミサの寶」を其の頃僕は、能く讀みました。君は、再オラトリオへ歸つて僕達に逢へまいと申されますネ。ところが僕躬も何だか體が弱つて來て、學

問と生命との終點に大急ぎに馳けて行くやうな氣が致します。とにかく、かやうに致しませう二人共善い死をとぐるため、互に祈り合ひませう。そして、どちらか早く天國に行つた者は、生き残つた者の爲め、天國で席を設つて置いて、後から行く時、手を差し延べて天の住家の其の席に引き入れることに致しませう。

願はくは、天主さまが僕等を護り、早く聖人になれるやう助け給はらんことを祈ります。友達は、皆、君がオラトリオへ歸つてくる日を待つてゐます。

皆、よろしく申し添へました。

兄弟としての親愛の情を持つ

君の忠實なる

サウイオ・ドメニコ

マッサリアの病は、一時大いに宜くなりましたが、再あらたまりて遂に臨終の時を迎へました。

其の村のバルフレ靈父は

「マッサリアは、謹慎を以て臨終の秘蹟と天國への旅糧たる聖體拜領とを了して吾がカトリック教の總ての最善の慰安を受けて、天國に昇る義人として死にました。」

と、申しました。

天主さまの御思召であるとは知りつゝも、心友の歸天の訃を聞いたときドメニコは悲しみました。其の美しき友情の中に數日を涙で送りました。私は天使のやうなドメニコが、悲しさうな顔をして、これほど泣いたのを見たのは初めてでありました。ドメニコの此の頃の慰安の一つは、死んだ

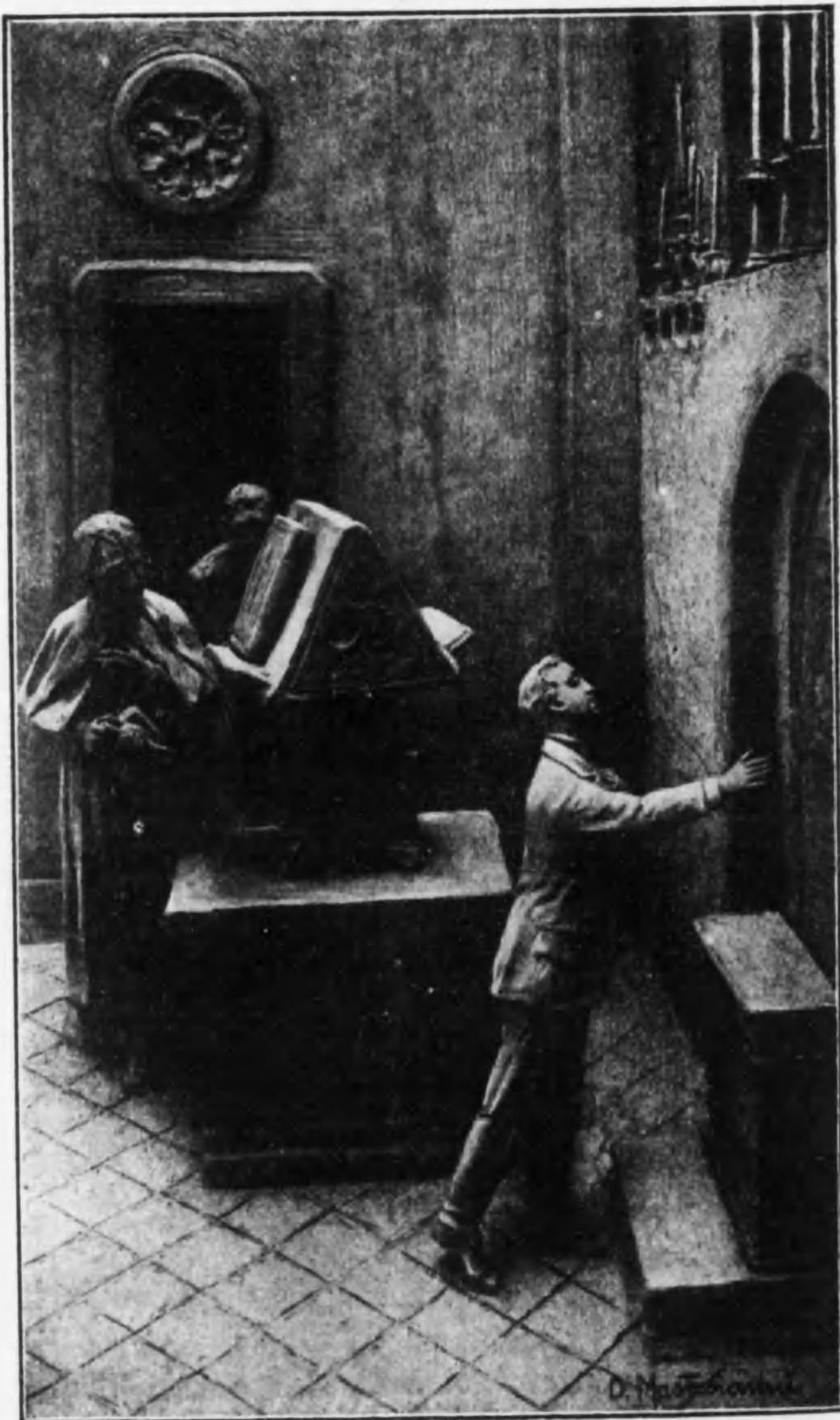
友の爲め、祈り又人にも祈つてもらふことでありました。

ドメニコは時々

「親愛なるマッサリア君よ！君は、もう死にました。それで、今はガビヨ君と一緒に居るでせうが、僕が永遠の樂園に君達を見る時は、嗚呼、何時でせうか。」

と、申しました。

ドメニコは、その生存中、信仰の務の時は、この友を忘れたことはありません。「僕の爲めに盡して死んで行つた友達を、天主さまに頼ますには、ミサの拜聴も、又祈りも善く出来ない」と時々申して居ました。マッサリアの死は、ドメニコの優な心にとつて、非常な痛傷でありました。此の爲めにドメニコの苦痛は増し、健康も急に衰へたやうでありました。



十九 他の御恵ご出来事

今、私がお話ししようとすることは、聖書や、聖人傳に書いてある出来事に似てゐます。

これは、私が躬實際に見た事でありますから、真でありますと保證することが出来ます。けれども、皆さんは、餘り深くお考へにならぬが宜いでせう。

ドメニコは、聖體を拜領したり禮拜したりするときは、全く氣を奪はれて祈つて居ました。時々、他の務に差支へる程、時間が過ぎますから、聖堂より呼び來たらしめねばなりませんでした。

或日のことでありました。ドメニコは、朝飯にも、學校にも、晝飯にも來ません。しかも、其の何處に居るか、誰も知つて居る者はありません。



修學室も寢室も査べましたが居ません。校長靈父に此の事を告げると、「それでは恐らく聖堂にではないか」とて校長靈父は躬聖堂に往いて見ました。ドメニコは事實、聖堂に居ました。と見れば祭壇の後に石のやうに、ぢつとして居るのを見付けました。目た、き一つせず祭壇を、ぢつと觀て居ました。靈父が呼びましても答はありません。揺り動かすと初めて振り向いて

「おや！もう御ミサは終つて居るのですか。」

と、申しました。靈父は時計を出して

「御覽なさい。午後二時です。」

と、申しますと、ドメニコは規則を破つたと思ひ付いて、心配し初めました。靈父は、食堂に行かせ

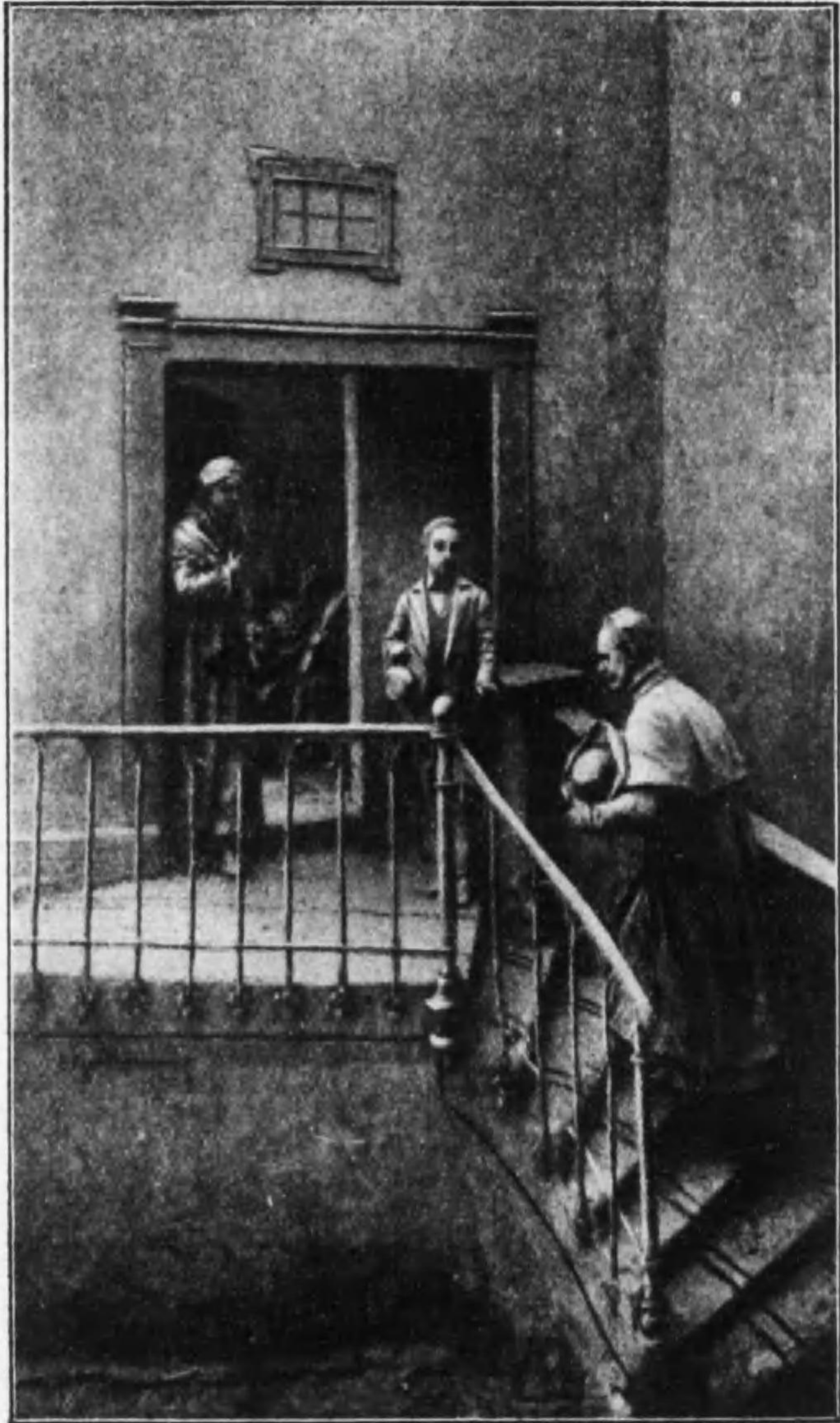
「若し誰か『何處から來たの』と、問うたならば、今、私の命令で用達をして來ましたと、答へなさい。」

と、勧めました。これは、友達の徒勞な尋を避けさせる爲めでありました。

又或日、私はミサの感謝を致さうとして、聖堂に入らうと思ひますと、ふと人の話し聲が其處から聞えて來るではありませんか。見るとドメニコが、質問した後で、其の答を待つてゐるかのやうな様子をして、其處にゐるのであります。

ドメニコ「はい、吾が天主さまよ、僕は、も一次申し上げます。僕は天主さまを臨終の時まで愛し奉るやう心掛けます。若し、僕が天主さまに叛かうとするのを御覽になりましたならば、どうぞ僕を死なしてください。さうです、罪を犯すよりも、むしろ死ぬるが勝れる……」

と、申してゐました。



或日、ドメニコ、私の室に駆け込んで参りました。

ドメニコ「靈父さま、早く僕と一緒に御出でください！爲すべき善行があります。」

私「君は私を何處へ連れて行くのですか。」

ドメニコ「早く御出でください、早く。」

私は、此の少年に伴れられて舊トリノの込入った小路を歩きました。そして、とある家に着きますれば、其處の四階に一人の男が病に苦しんで居ました。

ドメニコ「此處です。」

と、云ひすて、ドメニコ躬はオラトリオへと歸りました。

その人は、先に教を棄て、新教徒になつてゐましたが、死に先立つて青年時代に奉じた眞の教に歸らうと望んで居たのでありました。

私は、天主さまのお力で、其の人を眞の教に歸らしめました。そして數分時の後、この人は、イエズスさまの平和の中に靜かに永遠の眠に入りました。

どうしてドメニコが、この臨終の靈魂の呼號を聞いたかは誰も知ることが出来ません。私も、たつた一次、其のことを問ひましたが、ドメニコは苦しい態度で私を見詰め、涙を流すばかりでありましたので、再知らうとすることが出来ませんでした。

天主さまは、いつもドメニコと一緒に居給うた。天主さまは、遊時間の時、ドメニコを召しては、お言葉を賜はるのでありました。ドメニコは此のことを「僕のいつもの樂」と、云つてゐました。

ドメニコは、靈魂の救の爲め、豫言をすることが出来るやうになつてゐる

ました。

或日、遊時間のとき、友達が、天國の喜に就いて話してゐました。ドメニコは

「罪無き純潔な靈魂は、天國に行つて吾等の天主教主に近づき、永遠の幸の中に、其の靈魂の爲めのみの聖歌を歌ひ樂しむのでありませう。」

と、申しました。

ドメニコは、教皇さまに大切なことをお話しませねばならなかつたのでお目に掛りたく思つて居ました。よく其の事を口にしましたので、私は、ピヨ九世教皇さまに、どんなことをお話したいのかと、ドメニコに尋ねてみました。



ドメニコ「若し、僕が教皇さまにお話しすることが出来ますならば、教皇さまが、種々の御配慮の中にも、特に英吉利の國にお心をお用る遊ばれることをお止め遊されぬやう奏上げたくございます。それは、天主さまが、この王國にカトリックの大勝利を準備し給うてゐるからであります。」

私「誰が、そのやうなことを君に話したのですか。」

ドメニコ「靈父さまには申しますが、他人には黙つていらしてください、皆が僕を嘲笑りますから。或日、聖體を拜領した後、感謝をしてゐますと、僕は急に呆然となりました。僕には、何だか暗い／＼廣い原を見てゐるやうな気がしました。その原には、道に迷つた旅人のやうに手探りで、うろ／＼して居る人達が充満してゐました。この國は英吉利である」と、僕の側にゐた人が申しました。そして、僕は「ビヨ九世

一八五六年
我安政三年

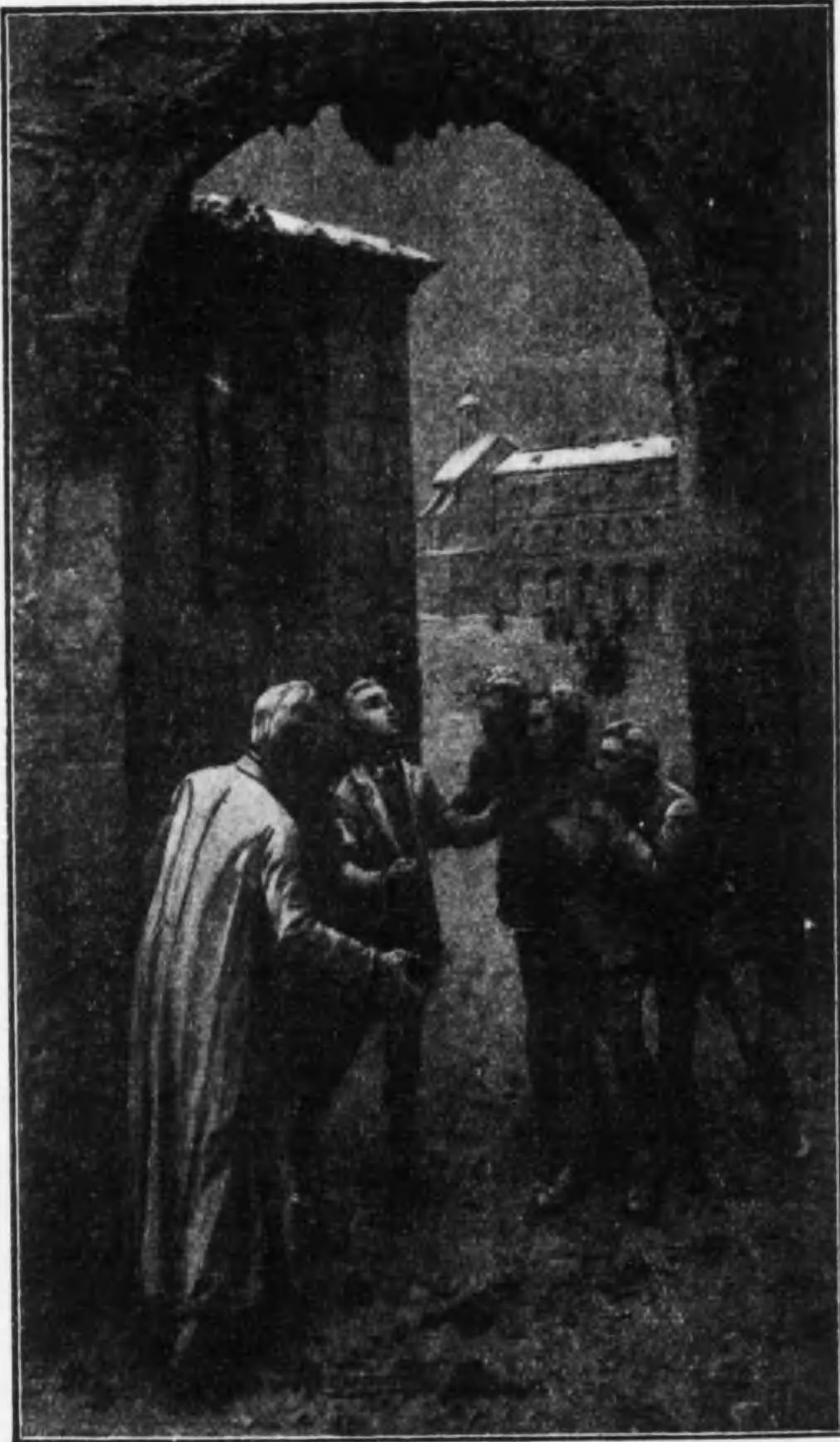
一八五八年
我安政五年

教皇さまが、教皇の盛装を召して、火の明々と燃ゆる松明をお手にして、其の暗黒の原に進んで行かれるのを見ました。教皇さまがお進みになるにつれて、暗は漸々に消えてゆき、原は眞晝のやうに光り輝きました。其處にゐた人は、僕に「この輝く松明は、英吉利を照すべき信仰の印象である」と、申しました。」

ドメニコは、英吉利の國では、カトリックが未だ問題にならぬ程少ない時に、此のことを申したのでありました。一八五六年には、まったく、其處にはほんの僅少のカトリックしか居なかつたのでありました。

私は一八五八年、羅馬に参りましたとき、このことを教皇さまに奏上しました。教皇さまは、之を喜んでお聴きくださいました。

他にも、これに似た幾多の話がありますが、もうこれ以上申す必要もありませんまい。



二十 死に對する考。善く
死する爲めの準備。

このドメニコの傳記を、此處まで讀んで來た人達は、ドメニコが、いつも何時も善死の準備をして居ると云ふことが善くお解りになりましたでありませう。實際、ドメニコは、臨終のとき、聖母の御保護を得る爲めに、汚れ無き聖母の會を組織したのでありました。

とかくするうち、ドメニコの死が近づいたことを、誰も解るやうになりました。ドメニコは其の死ぬ日と、その境遇とを天主さまの啓示で知つたのか、それとも又、他に何か豫感でもあつたのか、どうか存じませんが、ずつと前から其の死に就いて話してゐました。

ドメニコは、體が弱かつたので、學問と信心との務を減らすやうに勧め

られました。實際、其の體は弱く小さくして、病氣と不斷の緊張した精神との爲め日一日と力が衰へて参りました。躬もこれを感じてゐましたのか時々、「僕は、道を急がねばなりません。さうしなければ日が暮れて了ひます。」と、申してゐました。この意味は、生きてゐる時間が少なくなつて來ましたから、死ぬ前に澤山の善行をせねばならぬといふことでありました。このオラトリオでは、少年達が、毎月善死の準備をする習慣がありますそれは、假にこれが最後の秘蹟であると定めて、最善の告解と聖體拜領とをする爲め準備を致すことであります。ピヨ九世教皇さまは、この信仰の行に全贖宥を附與へてくだされました。

ドメニコは、この死の準備の練習を甚謹んで行ひました。式の最後のところで、その式に與かれる者の中、最初に死ぬ者の爲め、一次天使祝詞と主禱文とを唱へるのであります。ドメニコは、にこ／＼しながら

「最初に死ぬ者の爲めにと、云ふよりも、寧ろドメニコ・サウイオの爲めにと、云へば尙宜しいですネ。」

と、申しました。而してドメニコは今迄より一層熱心に、最も仁慈の母聖マリアの御保護を頼みました。

一八五六年の四月も終る頃、ドメニコは「聖母に奉獻せられし聖月五月を、最善最良に送るには如何しなければなりませんか。」

と、靈父にお尋ね致しました。靈父は

「卿は、卿の總ての義務を果すやうに心掛けなさい。そして、聖母マリアさまについて益ある數々のお話をなさい。それから、毎日々々聖體を拜領しなさい……」

一八五六年
我安政三年

と、申しました。ドメニコは

ドメニコ「僕は、さう致しますやう靈父さまに御契約致します、けれども
 どんなお恵をお願ひ致すべきでありますか。」

靈父「天主さまが、卿に健康を與へて聖人にしてくださるやうに、聖母
 マリアさまの御轉達を願ひなさい。」

ドメニコ「はい、靈父さま、聖人になるお恵を享けて、聖にして死するた
 め、臨終の時僕を護りくださつて、さて死後は僕の靈魂を天國にお導
 きくださるやう聖母マリアさまに祈りませう。」

ドメニコは五月中、喜の中に聖母マリアさまのことを語り、聖歌を歌
 ひ、祭壇を飾りなどしてその月を送りました。

或日、一人の友達がドメニコに

友達「君は本年爲すべき總てのことをしたら、來年は何をしますか。」

と、問ひますと、

ドメニコ「え、今年果すべきことは果します。そして若し來年生きてゐ
 たら、果すべきことを君に申しませう。」

と、答へました。

私は、ドメニコの體を、どうにかして健康にしたいと思つて、多くの醫
 者と呼びました。醫者等は、天國へ向つて歩みつ、ある此の弱き少年を、
 飽かず眺めてゐました。而して醫者等は皆、ドメニコの愉快な氣象と、頓
 智の才敏と、慎重の態度とに感心せぬものはありませんでした。醫者の一人
 ハラウリ氏は、天主さまを知る善良なる紳士でありましたが、

ハラウリ「まア、なんと大切な寶玉でせう……この少年は。」

私「彼の健康は、日一日と衰へますが、一體何の病氣でせうか。」